

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VI—3

1979

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VI—3

1979

滋賀県教育委員会
財団 法人 滋賀県文化財保護協会

はじめに

県下のは場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生き立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和 54 年 3 月

滋賀県教育委員会
文化財保護課
課長 沢 悠光

例　　言

1. 本報告書は、昭和53年度の県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち湖西地区（高島郡）と湖北地区（長浜市）の調査成果を収載したものである。
2. 本調査は、滋賀県農林部耕地建設課からの依頼を受け、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師田中勝弘、同兼康保明を担当者として実施した。
4. 調査にあたっては、地元各市町の役場、教育委員会、区長から種々の協力を得た。
5. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとにしるすとともに、報告の文責は文末に明記した。記して感謝の意を表す次第である

目 次

第1章 高島郡マキノ町仏性寺遺跡

1. はじめに	3
2. 位置と環境	3
3. 調査の経過	3
4. 調査の結果	5
(I) 層位	
(II) 各トレンチの状況	
(III) 第54トレンチの調査	
5. 出土遺物	9
(I) 繩文式土器	
(II) 湖西の縄文時代後期の土器	
(III) 石器・その他	

第2章 高島郡高島町中ノ坊遺跡

(構口遺跡)

1. はじめに	21
2. 調査の経過	21
3. 調査の結果	22
(1) 層位	
(2) 遺構	
4. 出土遺物	31
(1) 土器	
(2) 金属製品	
(3) 石製品・土製品	
5. 小結	35

第3章 長浜市熊岡山西遺跡

1.はじめに	39
2.位置と環境	41
3.調査の経過	41
4.調査の結果	42
イ. 遺物包含層	
ロ. 遺物	
5.まとめ	50

插 図 目 次

第1章 高島郡マキノ町仏性寺遺跡

第1図 遺跡位置図	4
第2図 仏性寺遺跡トレンチ配置図	6
第3図 土層模式図	7
第4図 第54トレンチ土層図	8
第5図 土偶実測図	14
第6図 石器実測図(1)	17
第7図 石器実測図(2)	17

第2章 高島郡高島町中ノ坊遺跡

第1図 遺跡位置図	21
第2図 トレンチ配置図(1)	23・24
第3図 トレンチ配置図(2)	25・26
第4図 トレンチ土層模式図	27
第5図 第33トレンチ拡張部	28
第6図 焼土壙実測図	28
第7図 集石遺構平面図	29
第8図 第37・38トレンチ断面図	30
第9図 土器実測図	32
第10図 焼土壙出土土器	32
第11図 鉄製品実測図	33
第12図 鉄製品・その他実測図	34

第3章 長浜市熊岡山西遺跡

第1図 遺跡位置図	39
第2図 付近地形図及び調査位置図	40
第3図 断面土層図	41
第4図 試掘地点断面土層柱状図	41
第5図 出土土器実測図(1)	44
第6図 " (2)	45
第7図 " (3)	46
第8図 " (4)	47
第9図 " (5)	48
第10図 " (6)	49

図版目次

1 高島郡マキノ町仏性寺遺跡

- 図版1 (上) 調査地全景 (南より)
(下) 調査地全景 (北より)
- 図版2 (上) 埋没樹木出土状況 (第1トレンチ)
(下) 加工木・自然木の出土状況
- 図版3 (上) 第54トレンチ號面
(下) 第54トレンチ壁面
- 図版4 (上) 第54トレンチ繩文式土器出土状況
(下) 第54トレンチ繩文式土器出土状況
- 図版5 (上) 第54トレンチ繩文式土器出土状況
- 図版6 繩文式土器実測図 (1)
- 図版7 繩文式土器実測図 (2)
- 図版8 繩文式土器実測図 (3)
- 図版9 繩文式土器実測図 (4)
- 図版10 繩文式土器実測図 (5)
- 図版11 繩文式土器実測図 (6)
- 図版12 繩文式土器実測図 (7)
- 図版13 繩文式土器実測図 (8)

2 高島郡高島町中ノ坊遺跡

- 図版14 (上) 調査地西半 (東より)
(下) 調査地東半 (西より)
- 図版15 (上) 第33トレンチ拡張部 (南東より)
(下) 焼土壠 (北より)
- 図版16 (上) 第37~40トレンチ遠景 (南より)
(下) 第38トレンチ全景 (東より)
- 図版17 (上) 第38~40トレンチ (西より)
(下) 集石の状況 (北より)
- 図版18 (上) 第38トレンチ西拡張部敷石 (西より)
(下) 同 上 (南より)
- 図版19 (上) 第37トレンチの集石 (北西より)
(下) 第39・40トレンチ全景 (北西より)

表目次

高島郡マキノ町仏性寺遺跡

高島郡内繩文時代後期土器編年表

第1章 高島郡マキノ町仏性寺遺跡

1. はじめに

本報告は、高島郡マキノ町所在仏性寺遺跡についての、昭和53年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。

仏性寺遺跡は、地元で寺院跡として伝承されてきた場所で、「滋賀県遺跡目録」（昭和40年度版、滋賀県教育委員会編）にも記載されている周知の遺跡である。ところがこの場所が、昭和53年度の県営ほ場整備の対象地域に含まれることから、伝承のみで実態の明らかでなかった本遺跡の性格を把握し、適切な保存処置を講ずるため発掘調査を実施した。

2. 位置と環境

仏性寺遺跡は、高島郡マキノ町蛭口字仏性寺に所在し、国鉄湖西線マキノ駅の西方約1.4kmに位置する。遺跡付近の標高は90mで、湖岸より約1.8km程内陸部にあたる。しかし、知内川と百瀬川にはさまれたような位置にあるため、地下水位が高く、マキノ町でも有数の深田である。

仏性寺遺跡については、「仏性寺」の字名をもつ水田があるほかは、地上に寺院跡を示すような形跡は何も認められない。ただ地元の伝承によれば、「田の中に大きな木の株が埋っている」、「田の泥の下に石畳が残っている」、あるいは「田の底に壺が埋っており、足にあたる」などと言われているが、いったいいつごろの寺であるのかは不明である。

幻の「仏性寺」は別として、蛭口の周辺には遺物の出土によって所在の明確な遺跡も少なくない。遺跡の立地は、概ね現在の集落より上手にあり、仏性寺遺跡が付近で一番低い位置に立地する。仏性寺遺跡との関連で興味深いのは、蛭口の旧牧野西中学校々庭で発見された蛭口遺跡があげられよう。この遺跡からは、縄文式土器や弥生式土器が出土している。出土遺物は、大谷大学と地元で保管されているといわれているが、現在その詳細については不明である。また蛭口宮には、御塚、小塚の円墳が所在するほか、須恵器の杯の中に和同開珎を5枚納めた特異な遺物が出土している。伝承地としては、寺院伝承地が寺久保（薬師堂遺跡）、沢（成楽寺遺跡）などにある。また、沢には、田宮氏の館の伝承がある小丸遺跡もある。

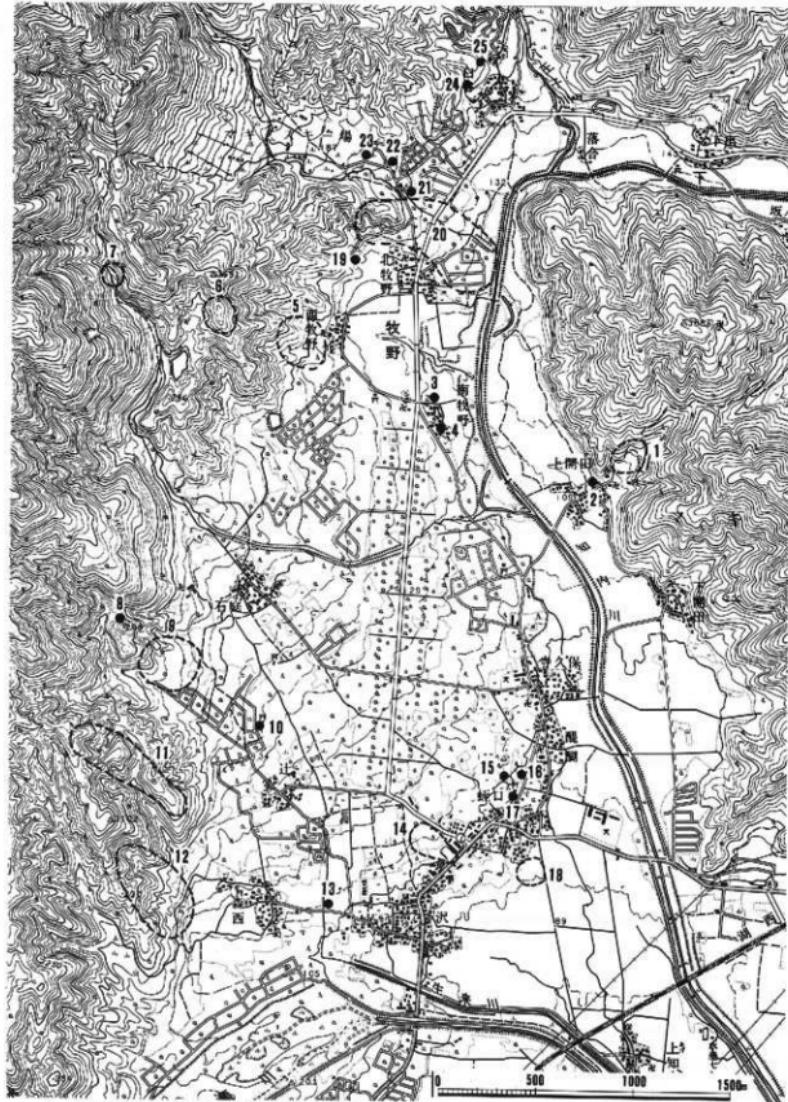
3. 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、現地調査は滋賀県文化財保護協会嘱託本田修平を主任に、昭和53年4月8日から29日まで実施した。

調査は、ほ場整備によって削平をうける地域内にトレンチを設定し、工事により地下に影響のある部分まで、バックホウを用いて層ごとに順に掘下げた。結果的には、ほ場整備によって削平はうけるとはいものの、削平深度は浅く、直接遺構推定面に影響を与えるものではなかった。そこで、排水路を利用して部分的に深く掘下げ、遺構の有無と土層の観察を試みることにした。その結果、第54トレンチの地表下約1.6mで縄文時代後期の遺物包含層を発見した。

第54トレンチの調査は、湧水とそれに伴う壁面の崩壊で思うにまかせなかつたが、出土遺物の量は豊富で保存状況も良好なものであった。幸いにも遺物包含層の上面と、排水路の底部がほぼ同じくらいのレベルにあたるため、工事にあたっては排水路の床面がえぐられることのないよう保存処置を講じた。

なお調査期間中、地元マキノ町役場、マキノ町教育委員会の協力を得たほか、整理にあたっては酒井和子、堀



- | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 称念寺遺跡 | 2. 上開田遺跡 | 3. 南牧野遺跡 | 4. 里塚遺跡 | 5. 西牧野遺跡 |
| 6. 青籠城遺跡 | 7. 大谷川遺跡 | 8. 常の谷遺跡 | 9. 伏ノ木遺跡 | 10. 辻遺跡 |
| 11. 田置城遺跡 | 12. 背地山遺跡 | 13. 森西遺跡 | 14. 蛇口遺跡 | 15. 御塚遺跡 |
| 16. 小塚遺跡 | 17. 宮遺跡 | 18. 仏性寺遺跡 | 19. 北牧野D遺跡 | 20. 北牧野E遺跡 |
| 21. 北牧野A遺跡 | 22. 北牧野E遺跡 | 23. 北牧野C遺跡 | 24. 両方谷遺跡 | 25. 茶ワン山遺跡 |

第1図 遺跡位置図

内宏司氏の援助をうけた。記してお礼申しあげたい。

4. 調査の結果

(I) 層位

調査範囲内の全体的な層位は、遺跡地の現状が深い溝であるため、耕土下に明確な底土は認められなかつた。水田耕作土下の第2層は、茶褐色スクモ層か礫・砂層がしめる。第3層は、青灰色粘土となつてゐるのが基本的な層位であった。

付近を流れる知内川は、河川改良がなされて旧状と大きく異なるが、百瀬川は天井川である。かつては当遺跡地域への両河川による氾濫、滯水は相当激しかつたようで、第2層のスクモ・砂・礫層が互層になる所や、砂礫が厚い層をなしている所があつた。この状態を地形に即して記せば、姪口の集落から南側へ張出す微高地を、知内川と百瀬川の間に形成する。この微高地の第2層は、砂礫の厚い層となる。これより南側にある、地元で「マタドマリ」と言つてゐる溝は、スクモが基本的に第2層となり、これに砂が入りこむといった土層を形成している。

このように部分的な土層の違いはあるが、調査地域全体に地下水位は高く、各トレンチ共に湧水が激しかつた。

(II) 各トレンチの状況

調査地域全体の遺物出土状況をまずあげるなら、水田耕作土中に中世の土師質土器の小皿片の散布が認められる。第2層においてもスクモ、砂層の中から、耕作土と同様にごく少量ではあるが須恵器や土師器の破片の出土がみられる。しかしこの層には、近世の陶磁器をも含むことから、層的に安定したものとはいえない。第3層の青灰色粘土層には、砂のつまつた自然流路等があつたが、遺構は確認できなかつた。また、遺物の出土もなかつた。

次に、主要トレンチの調査状況についてみてみたい。

(第1トレンチ)

地元で「寺の境内に植えてあった木の切り株がある」という地点である。伝承の切り株は、耕土直下で検出された。第2層は、茶褐色のスクモ層で、遺物が出土した。遺物は、弥生時代中期の弥生式土器をはじめ、平安時代の須恵器、中世の土師質土器の小皿から近世の陶磁器までが入り混つてゐる。これら遺物は、切り株にひっかかるような状態で出土した。

(第8トレンチ)

土層は、水田耕作土約10cm、第2層砂礫層約10cm、第3層茶褐色スクモ層約10cm、第4層礫層約40cm、第5層灰褐色粘土層となる。出土遺物としては、第3層より斎串が出土している。

(第24・25・26トレンチ)

いずれも第3層の青灰色粘土層を切って、砂のつまつた自然流路が認められた。第24・25トレンチの自然流路は同一のものである。土層は、第2層黒褐色砂混り土、第3層黒褐色スクモ層であるが、基本的には同一層とみてよいであろう。

第26トレンチの自然流路についても、土層的には同様である。また、第24トレンチよりやや北側の第23トレンチのスクモ層より、少量ではあるが加工木の出土をみた。このことは、この付近における低湿地化、氾濫、滯水の激しさを示していると考えられる。

(第32トレンチ)

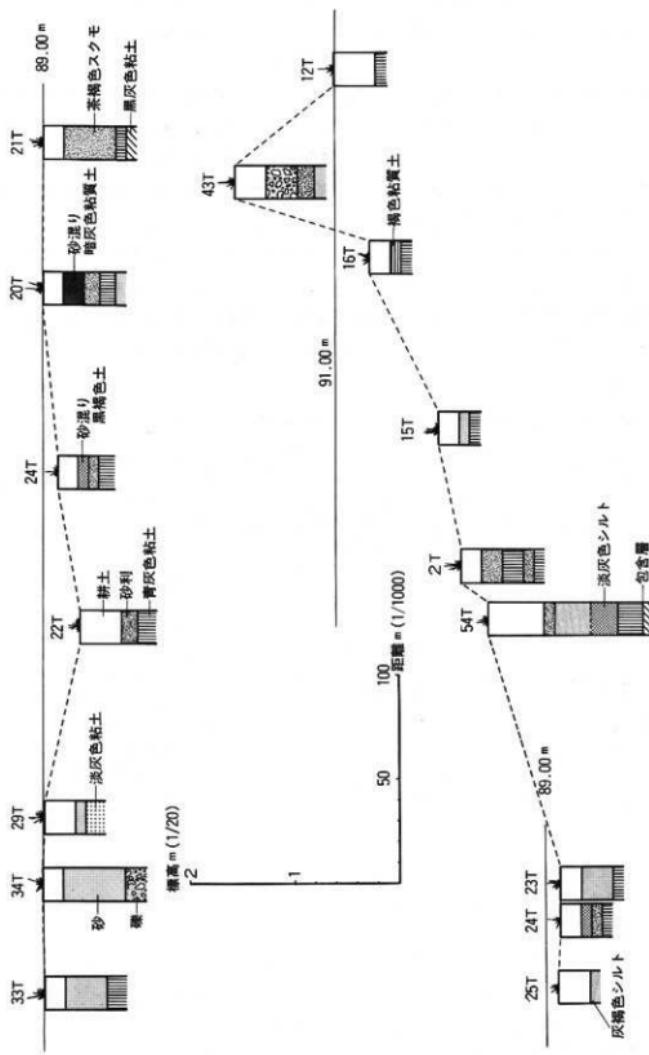
青灰色粘土層の上に約30cm砂層が堆積して第2層を作る。この層の中に少量の加工木や自然木が流入していた。以上が、寺院としての伝承をもつ仮性寺遺跡の、主要トレンチの調査状況である。このことから推定するなら、今回の調査地域は、流路が不安定だった二河川にはさまれるという立地にあるため、常に激しい氾濫と滲水をくり返していたと考えられる。この地域に安定した立地を求めるなら、現在の沢、船口、醍醐、寺久保などの集落が並ぶ標高100m ラインの扇状地であろうし、また遺跡の立地もこのことをよくあらわしている。

(III) 第54トレンチの調査

今回の調査の原因となつたのは場整備は、耕地の再区割もさることながら、湿田の排水を良くし乾田化を進めることも主な目的の一つになっている。そのために排水路は、現耕土下約1.5m 掘削される。この工事への対応として、排水路予定地を掘下げ、青灰色粘土層以下の土層確認のために第54トレンチを設定した。



第2図 仮性寺遺跡トレンチ配置図



第3図 土層模式図

土層は、第4図に示したように水田耕作土、第2層茶褐色スクモ層、第3層a灰褐色シルト層、第3層b淡灰色シルト層、第4層青灰色粘土層、第5層黒灰色粘土層、第6層淡青灰色粘土層、第7層のベースは砂層である。

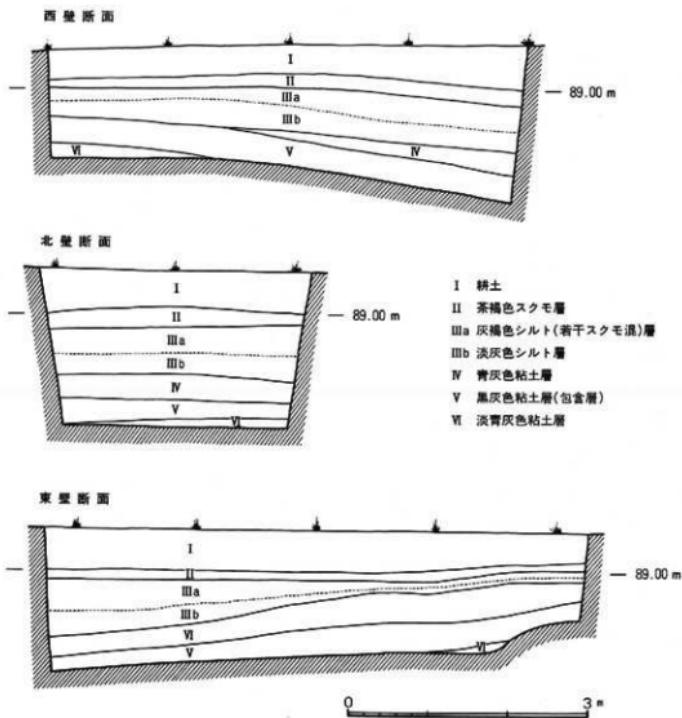
第2層の茶褐色スクモ層は、中世の土師質土器の小皿小片をごく少量含み、他のトレンチのそれと同様な状態である。

縄文時代の遺物は、第4層の青灰色粘土層にも少量含まれているが、遺物包含層となるのは第5層の黒灰色粘土層である。この遺物包含層は、表土下約1.6mの所から、層の厚い部分で約40cm程堆積している。しかし、層の厚さは一様ではなく、トレンチの南側では薄くなり、遺物の出土量も少なくなる。

現在の地形は、東側——知内川の方向と、南側——湖岸の方向に低くなっている。ところが遺物包含層は、地形とは逆に南から北へ落ち込んで堆積している。

遺物の出土状況は、激しい湧水により、時には遺物包含層が泥土化する中、泥中をさぐって遺物を採集するといった状況が生じ、小型の水中ポンプを用いて3m×7mのトレンチをこれ以上拡張することは困難であった。

出土遺物は、縄文時代後期の土器を主とし、土製品が2点あり、分銅形土偶1点を含む。石器は、磨製石斧3点、打製石斧4点、石錘5点、敲き石1点、敲き石1点、用途不明石器1点が数えられ、他に剝片などがある。しか



第4図 第54トレンチ土層図

し、石鎚や石匙など一般的な石器は少なく、石鎚の未製品と思われるものが1点あるのみで、石器の組成に片寄りがみられる。

土器の遺存状況は良く、磨滅がみられないことから、この遺物包含層は河川氾濫によって流入した2次的な堆積による遺物包含層でないことを示している。また、すでに述べたように、地下水位が高く湧水が激しかったにもかかわらず、炭化物は含まれてはいたが、植物質の遺物はまったく検出されなかった。

これらのことから、遺物包含層の性格は、立地より考えれば知内川の自然堤防の微高地土に集落があったことを推測させる。また、トレンチの状況よりみて、第54トレンチが遺物包含層の南端に位置している。

5. 出 土 遺 物 (図版 6~12)

今回の調査によって出土した遺物は、縄文時代後期の土器・土製品・石器等が主体となっており、他にごく少量の弥生式土器・歴史時代の土器・木器等がある。

(I) 縄 文 式 土 器

ここでは縄文時代後期の有文土器を第一群から第4群までに分けて、それぞれの特徴を中心についていくことにする。

a. 有文土器

第1群土器

磨消縄文 幅の太い沈線を伴う磨消縄文を特徴とする一群であり、色調は茶褐色が多く縄文はR Lが多い。

深鉢A(1~6) 頭部にやや屈曲がみられる形態で、口縁端部がほぼ丸くおさまるもの(1~3)と、やや内面肥厚するもの(4~6)の2種類がある。

深鉢B(7) 形態的には深鉢Aと同一形態ではあるが、口縁部が波状口縁であることが異なる。波頂部には棒状具による刺突が施される。

深鉢C(8) 口縁部は外傾し、口縁端部が内面肥厚ぎみに内傾する形態である。

浅鉢A(9) 口縁部が直線的に外上方に開く形態である。

浅鉢B(10) 体部より口縁部がなだらかに内弯する形態であり、口縁端部は内弯度を増して丸くおさまる。口縁部や下方を巡る2条の平行沈線より、一对の変形丁字文と星形文が垂下する施文パターンである。

第2群土器

磨消縄文 3条の平行沈線を伴う磨消縄文を特徴とする一群であり、縄文はR Lがほとんどである。

深鉢A(11, 12) なだらかに外反する口縁部で、口縁端部は外面肥厚する。色調は(11)が淡赤褐色で、(12)が灰褐色である。

深鉢B(13) 口縁端部が著しく内面肥厚した波状口縁になる形態であり、波頂部はなだらかである。色調は淡黒灰色である。

深鉢C(14) 口縁部は外傾し、口縁端部が内傾する形態であり、色調は灰色である。

深鉢D(15) 頭部に著しい屈曲がみられ、口縁部及び口縁端部の形態は深鉢Cと同一形態であるが、横状握手と小突起のある点が異なる。

深鉢E(20) 外面肥厚した口縁端部外面に、棒状具による刻み目を施す形態である。

(16~19) は、恐らく深鉢A及びBの底部と思われるもので平底である。色調は(16)の黄白色、(17)の淡灰

色以外は暗灰色である。

沈線文 磨消繩文と比較した場合やや異和感があるが、一応第2群土器の沈線文として扱っておくことにする。

深鉢A(21) 口縁端部が内外面に肥厚した口唇部上面に、1条の沈線と棒状工具による刻み目を施す形態であり、色調は淡茶褐色である。

深鉢B(22) 深鉢Eと同一形態であり、色調は淡灰褐色である。

深鉢C(23) コップ状の形態になるものと思われ、2条の沈線によって文様が施されている。色調は茶褐色である。

第3群土器

堀之内Ⅱ式の施文パターンに類似する一群である。

磨消繩文 繩文は全てLRである。

深鉢A(24) なだらかに弯曲し、頸部の屈曲がほとんどみられないコップ状の形態で、沈線内の刺突と区画文とにより施文される。色調は茶褐色である。

深鉢B(25、26) 形態的には深鉢Aと何ら変化はないのであるが、施文パターンが数条の平行沈線のみで構成されている点が異なる。色調は(25)が暗灰褐色で、(26)が黒灰色である。

深鉢C(27) 形態及び施文パターンとともに深鉢Bと同一であるが、口縁部の一部が小さな波状突起になる点が異なる。色調は黄白色である。

深鉢D(28~30) 形態的には深鉢Aとなんら変化はないのであるが、沈線と隆起帯との組み合わせによる施文パターンが異なる。(29)の隆起帯の刺突が竹管文であり、他は蓖状具と思われる。色調は(28)が淡黄褐色で、他は茶褐色であり、内外面共に丁寧な研磨が施されている。

深鉢E(31) 大きな山形になる波状口縁で、蓖状具による刺突及び棒状具による沈線文と蛇行文との施文パターンであり、色調は赤橙色である。

沈線文

深鉢A 形態及び施文パターンは磨消繩文の深鉢Dと全く変化がなく、深鉢Dに含めてよいと思われるが、小破片のため繩文がどこにも残っていないので、一応別けて沈線文としておく。1条の隆起帯には竹管文が施されている。色調は淡黒色である。

深鉢B(33) 波状口縁をもつコップ状の形態であり、口縁端部外面に1条の沈線と、波頂部より蛇行文を垂下させる施文パターンである。色調は黒灰色である。

深鉢C(34) 口縁部はやや外反し、口縁端部が内傾する形態であり、口縁端部外面に2条の平行沈線と、その上下に刻み目を施す。色調は淡黒灰色である。

深鉢D(35) 口縁部は直線的に外上方に立ち上り、突帯文と沈線との組み合わせである。色調は乳白色である。

深鉢A(36) 頸部が著しく屈曲し、口縁部が外反する形態で、口縁部が小突起状に盛り上り波状口縁となっている。外面には2条の平行沈線と縱方向の短線、それに堀之内Ⅱ式の特徴的な「8の字」貼付文がつく。色調は黒褐色である。

浅鉢B(37) 沈線文の深鉢Dと形態及び施文パターンがほぼ同一である。

繩文地 繩文はLRである。

深鉢A(38) 円筒状がコップ状の形態になるものと思われ、口縁部が小突起状の山形になる波状口縁である。波頂部よりまっすぐに垂下した沈線をはさんで、4条の平行線が入る。垂下する沈線内にのみ繩文が残る。色調

は淡黄褐色である。

第4群土器

北白川上層式に類似する一群である。

磨消繩文 條文は全て L R である。

深鉢 A (39) 頸部が屈曲し、口縁部が大きく外反する形態で、口縁端部内面に瘤状突起が付く。口唇部文様帯は、直線区画文と渦巻き文との組み合わせで、胴部外面には全面的に繩文を施す。色調は淡赤褐色である。

深鉢 B (40, 41) 口縁部は外反し、口縁端部が内傾する形態であり、大きな山形の波状口縁となる。(40) は口縁端部外面に、縱・横の平行沈線で施文する。色調は黒褐色である。

深鉢 C (42) 口縁部は外反し、口縁部内面に隆起渦巻文を施す。色調は淡褐色である。

深鉢 D (43) 口縁部は内寄り、口縁端部が内外面にやや肥厚する形態で、色調は淡黄褐色である。

深鉢 E (44) 口縁部は直線的に立ち上り、口縁端部が外面肥厚する形態で、口唇部にも縱・横の直線文で施文する。この施文パターンは深鉢 B の (40) と類似している。色調は淡褐色である。

鉢 A (45) 口縁部は外反し、胴部が算盤玉状になる形態で、口唇部に複数の小突起がつく。作りは非常に丁寧であり、文様帯部分に丹が残る。色調は茶褐色である。

鉢 B (46) 大きな山形になる口縁部で、波頂部には巻き込み状の隆起文を施す。色調は淡茶灰色である。

浅鉢 A (47, 48) 口縁部は内傾し、胴部が内寄しながら浅く開く形態で、口縁端部は内傾する。区画する短線が直線的なもの (47) と丸味をおびているもの (48) の2種類あり、色調は前者が黒灰色で、後者が乳白色である。

浅鉢 B (49) 脇部及び口縁部がゆるやかに内寄する形態で、内外面には丁寧な磨きが施されている。口唇部には内面の文様に相対する位置に、蛇行状の隆起帯がつく。沈線内には押し引きによる刺突文を施す。色調は黄褐色である。

沈線文

深鉢 A (50) 口縁部がゆるやかに外反し、口唇部には幅の太い凹線と繩文を施す。色調は乳白色である。

深鉢 B (51, 52) 頸部に屈曲がみられ、口縁部が外反する形態で、半載竹管にて斜格子沈線を施す。口唇部及び口縁部の繩文はともに L R であり、(52) は2条の平行沈線により文様を区画する。色調は (51) が茶褐色で、(52) が黒灰色である。

深鉢 C (53) 形態的には深鉢 B と同一であるが、大きく波状口縁になる点が異なる。頸部には1条の沈線を施す。波頂部には刻み目を施し、半載竹管による7条の平行沈線を垂下させ、頸部沈線下にも複数の平行沈線を施す。口縁部外面には、箆状具による斜行線を施す。色調は茶褐色である。

深鉢 D (54) 口縁部が内寄り、口縁が小型の波状口縁になる。沈線が絡み合うように複雑な施文である。色調は黒褐色である。

鉢 A (55) 形態的には磨消繩文の浅鉢 A とよく似かよっているが、こちらの方がやや深い。口縁端部は内傾し、口唇部に2個一対の円形の突起と、L R の繩文を施す。色調は茶褐色である。

鉢 B (56) 体部及び口縁部は内寄り、口縁端部は内傾する。2条の平行沈線間に、箆状工具による刺突文を施す。色調は白灰色である。

鉢 C (57) 口縁部は内寄り、沈線は他の沈線文の土器に比較して太い。色調は淡黒灰色である。

鉢 D (58) 体部及び口縁部が内寄する形態で、口縁部や下方にかなり乱れた4条の平行沈線を施す。色調は

淡黄褐色である。

縄文地

(64、76) 以外は全て L R である。

深鉢 A (59) 口頸部は直立ぎみにやや外反し、口縁端部内面に段がつく。口縁部外面及び頸部に、2条の平行沈線があり、胴部は本遺跡出土土器の内では数少ない羽状縄文を施し、口頸部は無文帯になっている。内面には粗い条痕が残り、色調は淡茶褐色である。

深鉢 B (60) 口頸部は直立ぎみにやや外反し、頸部に1条の沈線が入る。口頸部は無文帯になっている。色調は黒灰色である。

深鉢 C (61) 典型的な縄帶文土器で、色調は灰褐色である。

深鉢 D (62) 形態的には深鉢 A と似かよっているが、口縁部が変形の波状文となっている。また、内面には縱方向にも縄文が施されている。色調は黒茶褐色である。

深鉢 E (67) 頸部に屈曲がみられ、口縁部が外反する形態で、胴部外面にのみ縄文を施す。色調は乳黄色である。

深鉢 F (68) 形態的には深鉢 E と似かよっている。口縁部外面にのみ擬似縄文を施す。色調は茶褐色である。

深鉢 G (69) 体部及び口縁部がゆるやかに内寄する砲弾型の形態であり、胴部内面は竈状具を使ったナデと思われる。色調は淡灰褐色である。

(63、70) は縄文地の深鉢のうち、頸部に屈曲がみられるものの胴部と思われ、(63) は縄文地の上に幅の太い沈線と細い沈線とで蛇行文を施し、色調は乳赤色である。また (70) は頸部より下方に縄文を施し、その上に J 字文及び渦巻き文を配して一部を消す。色調は黄褐色である。

鉢 A (64~66、71~73) 頸部に屈曲がみられ、口縁部が外反する形態であり、胴部は球体になるものと思われる。大鉢 (71、72)、中鉢 (64、73)、小鉢 (65、66) の三つに分けることが出来る。また頸部に明確な沈線が入るもの (66、71) や、口縁部内面に1条の沈線が入るもの (64、71、73) がある。また (71) の胴部下方には、補修孔と思われる2個一对の円孔が、4カ所に穿かれている。色調は茶褐色や黄褐色が多い。

鉢 B (74) 口縁部は内寄しながら内傾し、胴部が内寄している形態で、口縁端部外面に半巻き込み状の突起文を施す。色調は黄白色である。

浅鉢 A (75) 体部及び口縁部はゆるやかに内寄し、口縁端部がやや外反して外に聞く形態であり、胴部には羽状縄文を施す。色調は褐灰色である。

条痕文

深鉢 A (76) 悄らくコップ状の形態になるものと思われ、口縁部外面に竈状工具による斜行線を施す。色調は淡茶褐色である。

深鉢 B (77、80) 頸部に屈曲がみられ、口縁部が外反する形態であり、(80) は貝殻による刻み目と、同一施文具による削りを行う。色調は淡茶褐色である。

深鉢 C (78) 口縁部がほぼ直線的に外に外に向く波状口縁で、下方にてやや段がつく。口縁部外面には竈状工具により条痕を施す。色調は黒灰色である。

深鉢 D (79) 口縁部はやや外反し、口縁端部はやや尖りぎみである。口縁部外面には貝殻条痕を施す。色調は乳赤色である。

注口土器

磨消繩文 2条 (81) 及び3条 (82) の沈線からなる磨消繩文で、いずれも胴部と思われる。色調は黄白色であり、いずれも丁寧な磨きが施されている。

沈線文 (83) の口縁部はやや外反し、口縁端部において内外面に肥厚し、口唇部に梢円形の突起を施す。色調は黒茶灰色である。また (85) は2条の沈線間に突帯を施し、突帯部より口縁部が低く内傾している。色調は黒茶褐色である。同心円と沈線の組み合わせ (86)、同心円のみ (87) の胴部で、(86) は沈線内に押し引きによる刺突を施し、非常に丁寧な磨きが施されている。色調は黒色である。

繩文地 (84) 基部近くがふくらみ、先端部近くにかけて細くなりくびれる。このくびれた部分の一部に繩文が施されている。全体に丁寧な磨きが施されている。色調は黒灰色である。

口縁部、瘤状突起の一例 (88) 及び握手 (89) と思われ、(88) には棒状工具による刺突が多数施されている。

b. 無文土器

深鉢A (90~100) 口頸部は屈曲し、口縁部が外反する形態であり、口径もさまざまなものがあるが、総てこの仲間に入れておく。

深鉢B (101~103) 口頸部は屈曲し、口縁部が外反する形態であり、深鉢Aに比較して胴部の張りがやや大きいものである。

深鉢C (104、105) 口頸部は屈曲し、口縁部が外反する形態であり、深鉢Aに比較して胴部の張りの小さいものである。

深鉢D (106、107) 頸部の屈曲する度合が大きく、胴部の張りも大きなものである。

深鉢E (108) 頸部の屈曲がみられる形態で、大きな山形の波状口縁となり、口縁部はやや内弯する。

鉢A (109、110) 頸部の屈曲がみられる形態で、口縁部は大きく外反する。(109) には頸部に1条の沈線が入る。

鉢B (111) 体部から口縁部にかけてゆるやかに内弯している形態で、口縁端部はやや尖りぎみである。

鉢C (112、113) 全体的にゆるやかなカーブを描いて内弯する形態であり、(112) は口縁部が小突起状の波状口縁となる。

鉢D (114) 形態的には鉢Cと同様であるが、胴部上方において内密度を増し、口縁端部は内傾している。

鉢E (115) コップ状の形態であり、輪づみ痕が明瞭に残る。口縁部内外面に繩文を施す。色調は褐灰色である。

浅鉢A (116~118) 屈曲がみられず、口縁部が直線的に開く形態である。

浅鉢B (119) 屈曲がみられず、口縁部がゆるやかに内弯する形態である。

c. 底 部

A (120~133) 底部の少し上方で胴部がやや内側へくびれ、その後外反しながら上方へ開く形態。

B (134~141) 底部の少し上方にて胴部が内側に著しくくびれ、その後外反しながら上方に開く形態。

C (142~147) 底部より胴部がほぼ直線的に立ち上る形態。

D (148~153) 底部より胴部が直線的に大きく外に開くか、やや外反しながら開く形態。

これらの底部のうち、底部に圧痕のつく土器がある。この圧痕は (154) の木葉痕を除けば、他の全ては網代痕であり、図示しなかった底部をも含めた総底部数に対する圧痕を有する底部の割合は、およそ2割である。網代痕が残存する底部が第何群の土器に多いのか、また精製土器に多いのか粗製土器に多いのか、網代痕をもつ底

部と体部とが同一個体として出土したものが皆無に等しく詳細は不明である。

縄代の編み方は、「1本超え、1本潜り、1本送り」と、「2本超え、2本潜り、1本送り」の2種類が大部分と思われる。

今回出土した有文土器を第1群土器より第4群土器までの4群に分けて述べてきたのであるが、それぞれの群が縄文時代後期において、どの様な土器形式と併行関係にあるのか見ていくことにする。

まず幅の太い磨消繩文を中心とする第1群土器であるが、口縁端部が一部の土器（1、2等）を除いて内面肥厚する傾向にあり、これが次の第2群土器の口縁端部の肥厚へと統していくものであろう。また施文が口縁部上方には全くといっていいほどみられず、これは瀬戸内地方の中津式にみられるように口縁部上方にまで施文する方法とは異なり、やや後出的な要素と思われる。これらの点からして第1群土器は、縄文時代後期前半の中津式土器の新しい段階から、同じく瀬戸内地方の次の段階である福田KⅡ式へ移行する時期の土器であろう。

次に3条の平行沈線を伴う磨消繩文を特徴とする第2群土器は、これらが特徴よりして福田KⅡ式そのものと思われる。ただこの群に入れた中で（15、22等）は、ややこの特徴を備えているとはいえないものであるが、おおよそ福田KⅡ式の併行関係の範囲に入るものと思われる。

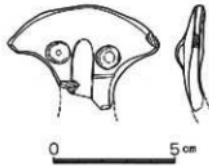
第3群土器は、この群を特徴づけている刺突をもつ隆帯と三角形の沈線による施文、「8の字」貼付文、多条沈線文等から関東地方の堀之内Ⅱ式の土器と思われる。ただ（31、33）は蛇行文及び口縁部内面への施文等からあるいはこの時期の土器とはやや異なり、次の加曾利B式へ移行するものであるかもしれない。この第3群の土器は、第2群の土器と時期的に共存したと考えられ、この時期、この地域が瀬戸内と東日本の2つの文化の接点であったことがうかがわれる。

第4群土器は、北白川上層式であるが、この第4群には桑鉢下式の主体となる深鉢⁵を含まず、縄文時代後期中頃の北白川上層式の古い段階のものと思われる。^{註1}

これらのことから第1群土器より第4群土器は、縄文時代後期前半より中頃までの時期のものであろうと思われる。また無文土器については、その形態等からして概ね第4群土器と同時期のものと思われる。

d. 土偶

土偶は下半部を欠くが、分銅形をしており、極めて抽象化しているが女性を表現している。頭部は省略され、左右に伸びた腕も辛うじてそれとわかるもので、乳房は二個の円形の粘土を貼りついている。



第5図 土偶実測図

(II) 湖西の縄文時代後期の土器

仏性寺遺跡出土遺物について述べてきたのであるが、周辺地域の他の遺跡から出土した縄文時代後期の遺物との比較により互いの関係がどの様なものであるかをみてみよう。

同じくマキノ町において縄文時代後期の遺物を出土する遺跡に上開田遺跡がある。仏性寺遺跡とは知内川の対岸、直線距離にして約2.5km上流、比高差にして約60m位の所にある。上開田遺跡の遺構及び縄文時代後期以外の遺物については報告書にゆずることにして、ここでは縄文時代後期の土器について検討していくことにする。上開

^{註2}

田遺跡出土の縄文式土器も、仮性寺遺跡出土遺物と同じ様に同一層からの出土であり、層ごとによる分類は困難な状態であった。しかし特徴的な土器を見いくと大きく別けて3つのグループに分けることが可能と思われる。

まず第1のグループは幅の太い磨消繩文を伴う土器(155)で、総点数にしめる割合のもっとも多いグループである。口縁端部の形態は、水平に面取りを行うものと内面肥厚しながら内傾するものがある。

第2のグループは北白川上層式に類似する磨消繩文の1群で、総点数にしめる割合のもっとも多いグループである。大きなキャリパー状になる波状口縁の深鉢(156、157)や平縁の鉢(158)等がある。

第3のグループは一乗寺Kを中心とする1群で、口縁部外面に棒状に粘土縞を貼り付け箆状工具による刺突文(160)や竹管文(159)を施す。また、この時期に多くみられる付加条繩文(161)の胸部もみうけられる。

また底部についてみると平底のものと上げ底のものがあり、平底には網代痕を残すものもあるが、仮性寺遺跡にくらべるとその残存率は低下し、5パーセントにも満たない状態である。

上開田遺跡出土の縄文時代後期の土器をおまかに述べたのであるが、これらのグループが縄文時代後期のどのような時期のものであるのかを次にみていくことにする。

まず第1のグループであるが、幅の太い沈線及び口縁端部の形態より典型的な中津式を含む一群である。次に第2グループであるが北白川上層式の類似形態であり、桑飼下式の中心形態である深鉢5に含まれ、北白川上層式でも新しい時期のものであろう。第3のグループは付加条繩文及び(160)等から一乗寺K式のものと考えられる。これらのことより上開田遺跡の縄文時代後期の遺物は、中津式を若干含むが、中心となる時期は北白川上層式の新しい時期のものから一乗寺K式へと続く縄文時代後期中頃を中心とする一時期に集中してくるのであり、恐らく網代痕の残存度の減少が、時期的に下がるにつれて、その割合を大きくしていくものと思われる。^{註3}

次に今津町において同じく縄文時代後期の遺物を出土する遺跡に北仰遺跡がある。仮性寺遺跡とは直線距離にして約4km南南西方向、ほぼ同じ標高である。同じく詳細は報告書にゆずるとして、特徴的な土器だけをみてみると、大きく別けて2つのグループに分けることができる。貝殻による末端削突、擬繩文、刻み目等の特徴より元住吉山II式(162~166)と、凹線文、貝殻压痕文等の特徴より宮滝式(168~171)までの縄文時代後期後半より末葉までの時期の土器が出土している。また(167)の土器は、1点のみではあるが北陸地方の縄文時代後期末の土器である八日市新保I式に類似点がみいだされ、北仰遺跡と北陸地方との交流がうかがい知れるのである、^{註4}その様に考えることによって宮滝式(168~171)の凹線文の大きさも、八日市新保I式の前型式の土器である、同じく北陸地方の御経塚II式との関連で考えることができるのかもしれない。時期的にはややさかのぼるのである^{註5}が、縄文時代中期後半においては、北仰遺跡に隣接する弘川遺跡出土の縄文時代中期の土器が、同じく北陸地方の中期後半の土器である車田新I式との類似点がみいだされ、早くから当地域と北陸地方の交流が考えられるのである。

仮性寺・上開田・北仰という3つの遺跡から出土した縄文時代後期の土器についてそれぞれ述べてきたのであるが、それではこの3つの遺跡がどの様な関係にあるのかをみていくことにする(しかし各遺跡出土の土器の量にばらつきがみられ、必ずしも正確な結果とはいえないかもしないが)。

今ここでもう一度3つの遺跡の時代区分を述べてみると、仮性寺遺跡が縄文時代後期前半より中頃までのものであり、上開田遺跡が一部後期前半を含む後期中頃を中心とする時期のものであり、一方北仰遺跡が後期後半より末という時期のものである。この様に3つの遺跡が時期的にほとんど重なることがなく(仮性寺遺跡と上開田遺跡において、後期前半において一部重なりが認められるが)続いているということは、いったい何を意味しているのであるか。まず第1に考えられるのが琵琶湖の水位上昇による高地への避難と低下に伴う復帰、

あるいは狩猟採集を生活基盤とする獲物及び食料を求めての移動等、自主的・他動的な2つの面が考えられる。しかし、先にも述べたように3つの遺跡の土器の出土量に大きな差があり、また縄文時代に開拓した遺構がみつかっておらず、生活基盤を決定する資料にはもう1つ難点があるなど決めがたいところがある。

しかし、いずれにしろ以上3遺跡出土土器で、湖西地方における縄文時代後期の土器が前半より末葉まで一応そろったことになる。磨消縄文隆盛より沈線文・刺突文への変化、底部も平底より上げ底への変化に伴う網代痕の減少、文様の複雑なものから単純なものへの変化等、一概には言えないまでも大きな流れとしてとらえる事が可能であると思われる。一方他地域との交流としては、縄文時代後期前半における瀬戸内地方及び東日本との交流、後期後半における北陸地方との交流という様に、広い地域との交流を物語っているのである。今後周辺地域での同時期の遺物・遺構の出土により、土器だけではなく当時の人々の生活状況をも知りえる資料の増加が期待されるのである。

(III) 石器・その他

今回の調査で出土した石器等は、磨製石斧3、打製石斧4、石錐5、敲き石・磨き石各1、その他3の計17点を数える。以下にその特徴を述べていく。

磨製石斧 (1~3)

3点出土しており、全て第54トレンチ第5層（黒灰色粘土層）からの出土である。全て定角式石斧であり、刃部は丸味をもった長方形のもの（1、2）、刃部を欠損しており正確にはわからないが、大きく聞くと思われるもの（3）の二つに大別できる。

打製石斧 (4~7)

4点出土しており、全て第54トレンチ第5層（黒灰色粘土層）からの出土である。片面に自然面を残すもの（5、6）、残さないもの（4、7）の二通りみられる。着襲部のくびれが総体的に少ないので特徴であり、刃部にかけて撓型に開くもの（6）と、ほぼ直線的に開くもの（4、5）、三角形状に開くものとの三つのタイプがある。刃部は、全て両面から打ち欠かれている。頭部の片面が使用時の摩滅から磨かれたようになったもの（4、6）もみられる。（7）は石錐の可能性もある。

石錐 (8~12)

5点出土しており、全て長軸両端を両面より數回打撃を加え打ち欠いているが、100g未満の河川等で使われたと思われる小型のもの（8、9）、100g以上の主に湖で使われたと思われる大型のもの（10~12）の二つのタイプに分けられる。このうちでも（8）は、削り込みにより糸かけを作り出している。石材は、河原石・花崗岩を使用している。

敲き石 (13)

第54トレンチより1点出土している。6面全てに使用痕がみられる。

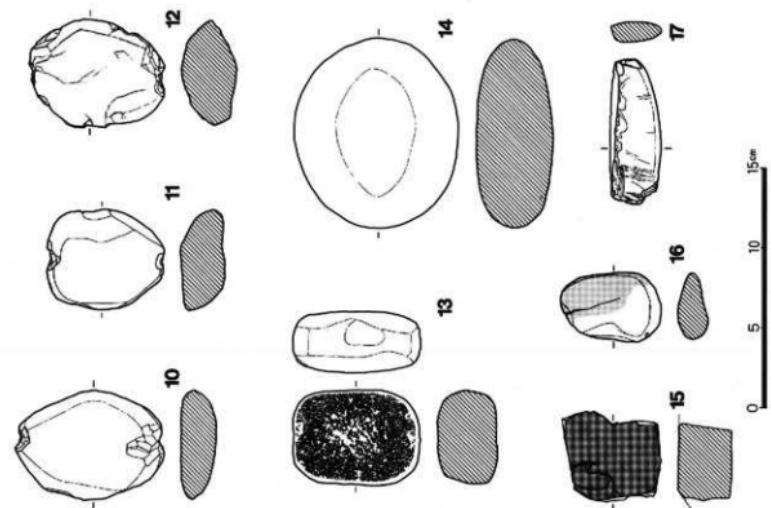
磨き石 (14)

第54トレンチより1点出土している。長短両軸側面にわずかではあるが敲かれた痕跡があり、あるいは敲き石としての機能も果たしていたのかもしれない。石材は河原石を使用している。

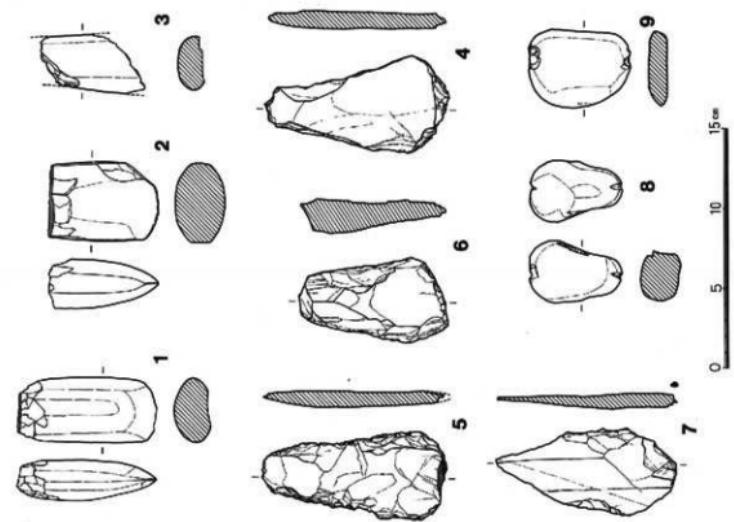
焼石 (15)

第54トレンチより1点出土している。生きた面が1面しか残っていないのであるが、火を受けた跡があり、あるいは人間生活の身近かにあった遺物かもしれない。

第7圖 石器測量圖(2)



第6圖 石器測量圖(1)



彩石 (16)

第54トレンチ第5層（黒灰色粘土層）より1点出土している。やや中くびれの一面に朱か丹が付着している。あるいはこの彩石を土偶と同様視していたのかもしれない。

使用痕のある石器 (17)

第54トレンチ第5層（黒灰色粘土層）より1点出土している。用途不明の石器で、刃部を持つが、刃部の鋭さに欠ける。両面を丹念に磨き、側面は意識的に打ち欠いたと思われる。無数の細い使用痕は、ほぼ1ヶ所に集中しており、その使用方法が推察されるのであるが、砥石としての痕跡か、あるいは着表部としての摩滅によるものかは判然としない。

註

1. 「桑飼下遺跡発掘調査報告書」(平安博物館、1975年)
2. 「マキノ町上闇田遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ-1 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、1980年)
3. 「今津町構遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅹ-2 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、1984年)
4. 「野々市町御経塚遺跡」(野々市町教育委員会)
5. 「今津町弘川遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅹ-3 滋賀県教育委員会、滋賀県文化財保護協会、1981年)
6. 南久和「北陸の縄文時代中期の編年について」(『南久和著作集第1集』 舟形書房 1985年)

本報告の文責は次のとおりで、兼康保明と堀内宏司が共同で編集した。

1、2、3……兼康保明、4……本田修平・兼康保明、5(I)……堀内宏司・兼康保明、5 (II)、(III)……堀内宏司

第2章 高島郡高島町中ノ坊遺跡 (構口遺跡)

1. はじめに

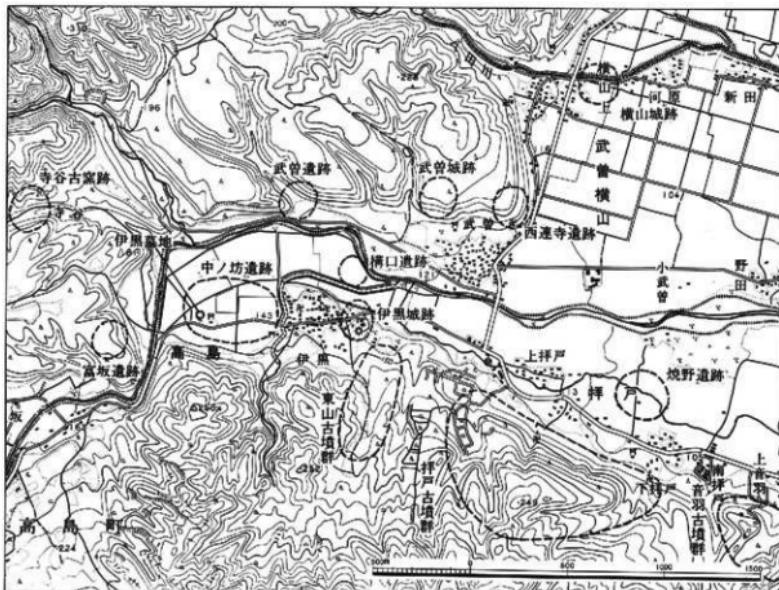
中ノ坊遺跡は、高島郡高島町高島（伊黒）に所在する寺院伝承地（『滋賀県遺跡目録』 滋賀県教育委員会 昭和40年）で、湖西の西岸にそびえる比良山地の北端の山麓にあたり、鴨川右岸の河岸段丘上に位置している。

昭和51年度より付近一帯では場整備が行われ、その際に遺物が発見されたことから、昭和52年度より発掘調査を実施することになった。昭和52年10月に行った発掘調査の結果、平安時代と鎌倉時代の遺物、遺構が検出された。調査の詳細については、「ほ場整備関係遺跡発掘調査報告 V」（滋賀県教育委員会 昭和53年）所収の「高島郡高島町中ノ坊遺跡」を参照されたい。

昭和53年度発掘調査の概要 昭和53年度の調査は、同年度のは場整備が夏と秋の二期に分けて実施することから、春と秋の二回にわたりて行った。本年度の調査でも寺院跡に該当する遺構の検出はなく、春の調査では「中ノ坊」の字名からかなり離れた地点の字「横口」で、中ノ坊遺跡とは性格の異なる新遺跡を発見した（横口遺跡）。この横口遺跡の広がりについては、昭和54年度にひき続いて実施する予定である。秋の調査は、昭和51年度調査地の北側にあたり遺構の検出がおおいに期待されたが、遺構および包含層はまったく発見されなかった。ただ、天満宮の北東に位置する、伊黒の墓地の周囲で、中世墓地の一角を検出したにとどまった。 (兼康保明)

2. 調査の経過

発掘調査は、昭和53年5月15日から6月14日まで実施した。夏期施工は場整備対象地は、鴨川の右岸、伊黒の



第1図 遺跡位置図

集落地の北側で、概ね東西 600m、南北 250m の範囲にあたる。

昭和52年、伊黒の集落地の西側、県道黒谷・勝野線に沿った東西約 500m の地域（中ノ坊遺跡）を発掘調査した結果、遺構が検出された。そこで、隣接する今回の地区でも、地形上遺構の存在が予想されることから、ほ場整備によって削平される水田について、トレンチを掘って遺構および包含層の有無について調査を実施した。

この地域は、河岸段丘のため大きく2段にわかれる。そのため、まず、地形の高い方の水田を西から東へ、次に低い方の水田を東から西へと、バックホウを使い 2×4m のトレンチを順次穿っていった。トレンチの数は、その後補足のために設けたものを含めて、第2・3図に示すように、84カ所にのぼった。このうち遺物包含層を検出したのは、第27~30、37~40トレンチで、耕土を除去すると遺物包含層となる。なお、遺物は、土師器の皿の破片が大半を占める。

5月26日からトレンチの埋めもどしと並行して、遺物の出土したトレンチを拡張し、遺物包含層の範囲確認を行ない、さらに遺構の有無を確認した。
(兼康保明)

3. 調査の結果

今回調査を実施した地点は、先述の如く鳴川右岸に位置し、鳴川が形成した河岸段丘面にあたる。地形図からも判るように、河岸段丘面は二段になっており、これらの土層について機械掘りによる試掘の際の観察をもとに若干述べてみたい。

(1) 層位

第一段丘面、第二段丘面ともに基本的な土層については類似していた。すなわち、地表から耕土（約25~30cm）、床土（約5~10cm）、そして黄褐色ないし灰褐色の粒子の粗い花崗岩の礫乱土と花崗岩礫からなる地山となっていて、昭和52年度の調査で検出されたような黒褐色粘質土（クロボク）は認められなかった。

第一段丘面と第二段丘面を比較すると、地山の状況にやや違いが認められた。それは、第一段丘面では、直徑1m にもおよぶ花崗岩が地山の中に入っていたりして、総体的に礫の占める比率が高く、湧水も著しい箇所があった。これに比して、第二段丘面は礫の混入状況や湧水という点からは安定していたと考えられ、試掘の際も第37~40トレンチにおいて遺物包含層が確認された。

(2) 遺構

焼土壙 第33トレンチにおいて検出された唯一の遺構である。第33トレンチは床土の下に黄褐色砂質土層（遺物包含層、約15cm）があり、少量の土師器小皿片と鉄釘を含んでいた。この包含層を除去するとすぐ地山となり、焼土壙のみ検出された。（第5図）

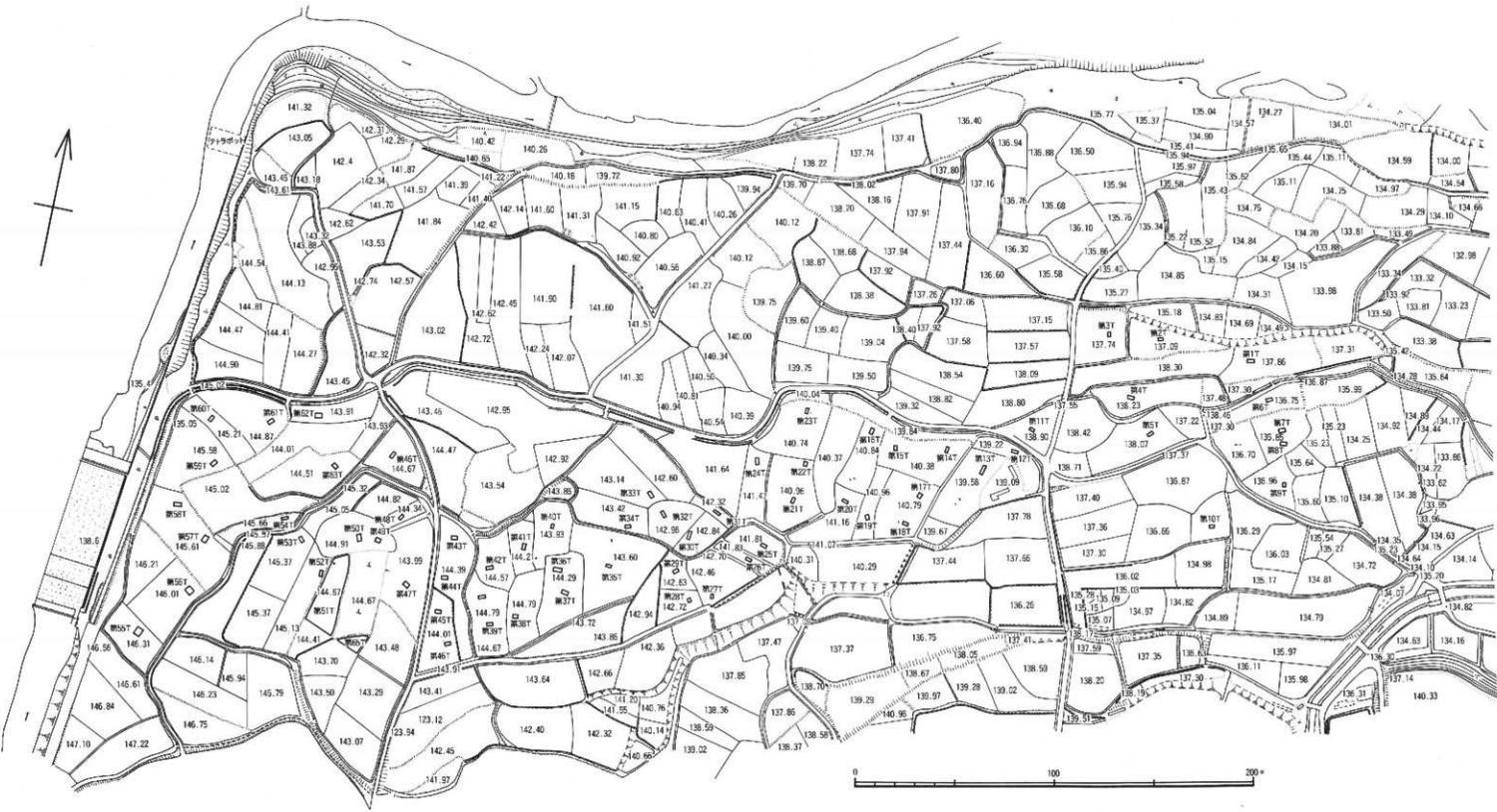
この土壙は、直徑約80cm、深さ約23cm を測る円形土壙で、底は丸底を呈する。土壙内からは多数の鉄釘・銅製飾り金具の破片・炭・焼けた古錢・土師器小皿・焼石などが出土した。（第6図）

落ち込み・敷石 第37~39トレンチにかけて遺物包含層が認められ、調査を行った結果、南北方向にのびる幅約13m、深さ約95cmの落ち込みと第38トレンチ西拡張部で敷石を検出するに至った。この落ち込みについては、第37・38トレンチでは部分的な掘り下げを試みたにとどめ、第39トレンチは完掘した。（第7図）

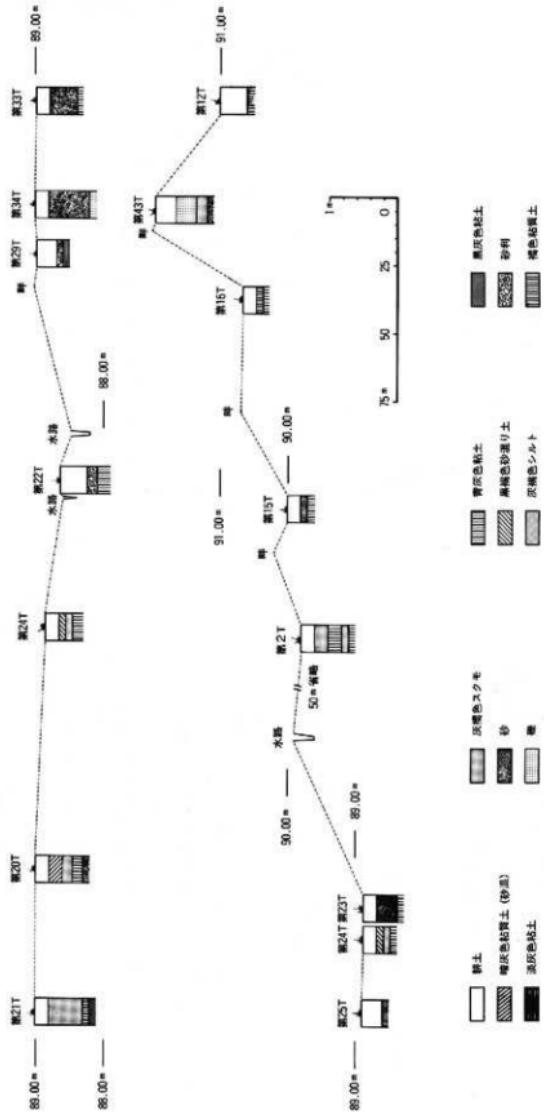
落ち込み内の土層は、基本的には4層に大別される。すなわち、上から順に見ると淡黄灰色粘質砂土層（Ⅰ層）、淡黒灰色砂質土層（Ⅱ層）、灰色砂質土層（Ⅲ層）、黒灰色粘質砂土層（Ⅳ層）となっており、地山は落ち込みの西



第2図 トレンチ配図図(1)



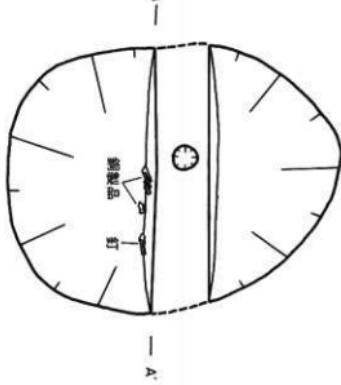
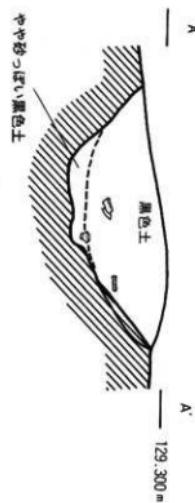
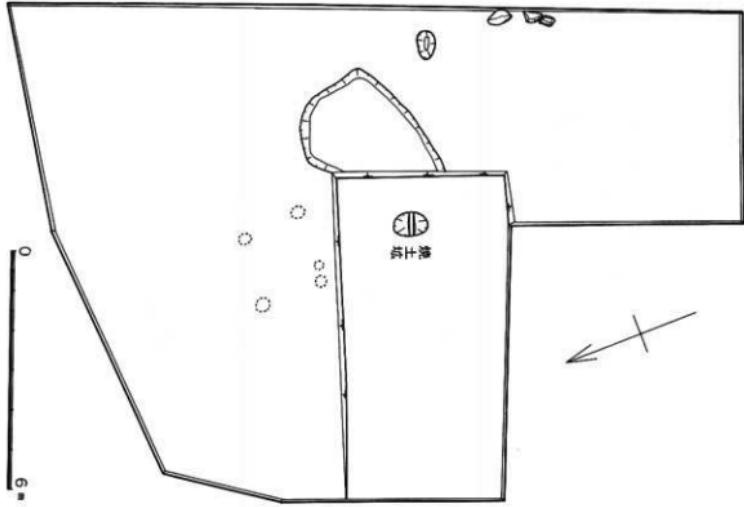
第3図 トレンチ配置図(2)

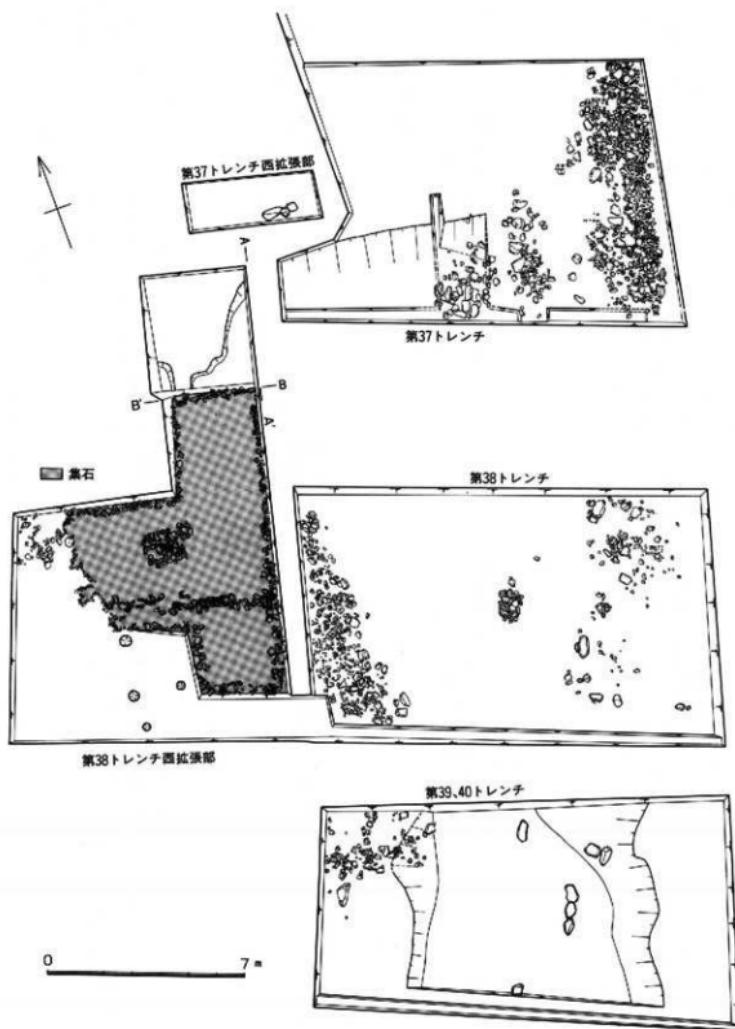


第4図 トレンチ土層模式図

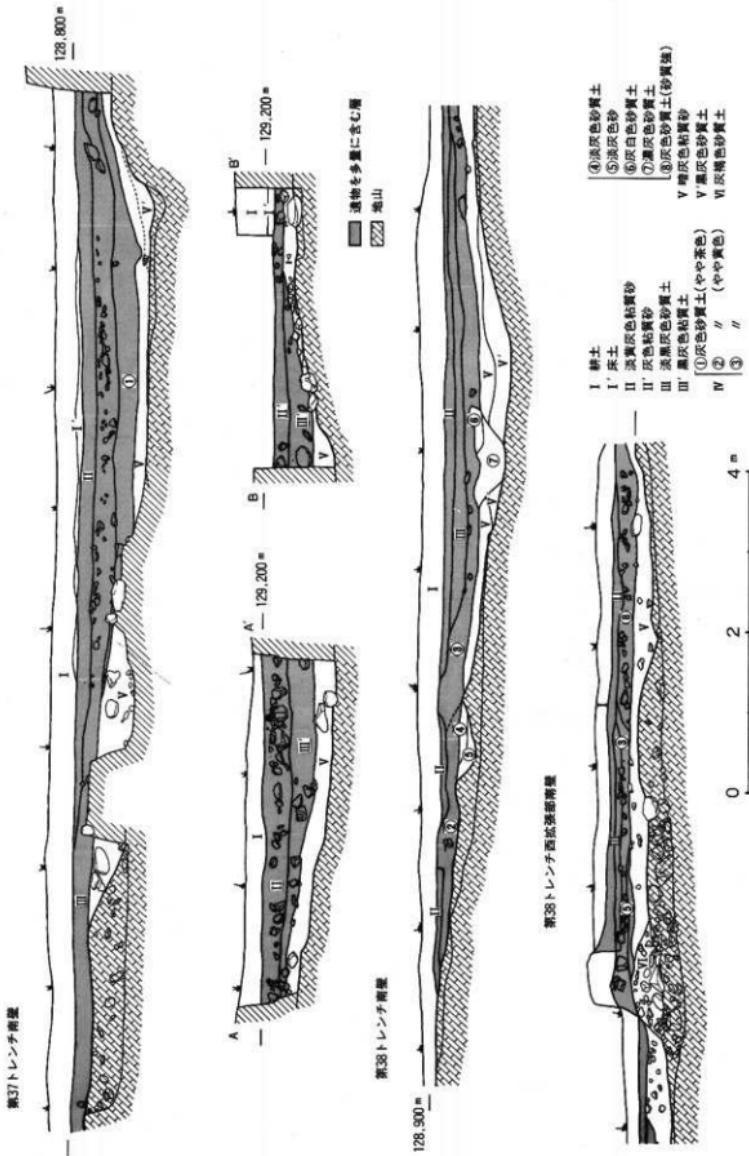
第5図 燃土堆積図

燃土堆積





第7図 集石造構平面図



第8図 第37・38トレンチ断面図

側の肩付近（畦畔の部分）から西は、花崗岩の礫を多く含み、西側では礫を多く含み、東側では礫が少ないという傾向が認められた。（第8図）

出土した遺物は、ほとんどが土師器の皿で、完形を保つものはごく少量にすぎず、小破片は多量に出土した。遺物の包含状況は、I・II層が圧倒的に多く、III層からは少量、IV層に至っては皆無に近かった。また、トレンチ毎に遺物の出土量を見ると、第38トレンチが最も多く、特に落ち込み西側のII層が顕著であった。統いて第37トレンチ、第39トレンチの順となる。第39トレンチは、落ち込みを完掘したにもかかわらず遺物の出土量は少なかった。なお、第38トレンチおよび第39トレンチの西側で直径10~20cmの河原石が多数検出されたことから、落ち込みの西側の状況を確認するため、第38トレンチの西側を拡張した。その結果、田面より約30cm下で、直径10~20cmの河原石が數きつめられたような状態で出土した。敷石の範囲は第38トレンチ西拡張部のある水田の東側 $\frac{1}{4}$ に限定されるが、南北の広がりは定かでない。落ち込みとの関係を調べるために、第38トレンチ西壁の断面を西側に延長した。その結果、落ち込みは第38トレンチ西拡張部の方へさらに7m続くことが判明した。現畦畔の直下に旧畦畔と思われる土層があり、落ち込み内の各層は、旧畦畔の形成以降に堆積したものであることが確認された。第38トレンチ西側の河原石のたまりについては、旧畦畔の崩れの可能性がある。また、第38トレンチ西拡張部の敷石はIII層中に存在し、IV層の堆積後に人為的に作られたものと考えられる。部分的に敷石をはずし、地表面まで掘り下げてみたが、自然の起伏に終始し、造構と思われるようなものは検出できなかった。（奥野宗寛）

4. 出 土 遺 物

昭和52年度の中ノ坊遺跡の調査では、10世紀から14世紀にわたる時期の、さまざまな日常雑器に使用された土器が認められた。それに対して、構口遺跡より出土した土器の大半は、土師器の皿——それもいわゆる「かわらけ」で、それ以外の器形、器種は、土師器の碗と陶磁器等わずか十数個体を数えるにすぎない。

土器の出土状況は、すでにみたように同一包含層からの一括出土であり、層位的に分けられるものではない。

(1) 土 器

A. 土師器

a. 皿 (1~13, 15~18) 皿は、その口径から概ね大・中・小の三種類に分けることができる。また、形態からA~Eまで概ね5種に大別できる。

A (1) は、B、Cに比べて口縁部の形態に特徴がある。

口縁部を外反させ、端部を上端につまみ上げる比較的古い形態をとどめており、器壁も薄い。大皿にのみ1例ある。

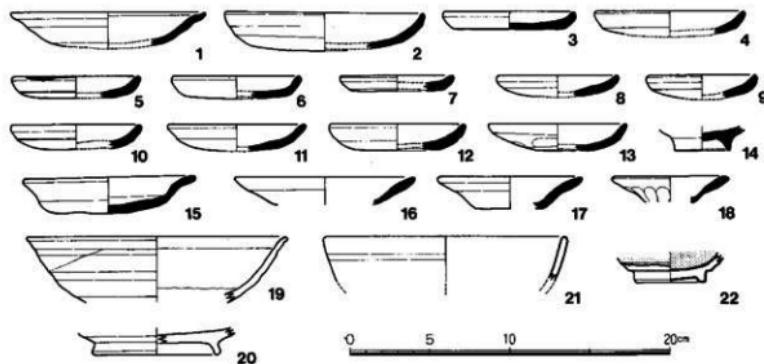
B (2~13) は、口縁部を外傾させ、端部を丸くおさめるこの種の皿としては通例の形態である。口縁端部の横ナデによって、端部が立ち上り稜をもつものがかなり認められる。また、小皿には、器高が低く扁平なものも認められるが、中ノ坊遺跡の例などから見れば、時期的な相違であろう。

C (15) は、外反する口縁部を大きく外方に開いた中皿で、量的にはあまり多くない。

D (16) は、形態を復原できるような大きな破片はないが、体部から大きく口縁部が外方に開き、口縁部が肥厚するなどの特徴をもっている。

E (17, 18) は、底部を欠失しているが「ヘン皿」と通称されている小皿である。

b. 碗 (14) 碗はすべて小破片で、皿に比べて深みのある内湾した体部をもつが、ひずみが大きいため図示



第9図 土器実測図

しなかった。(14)は断面三角形をした張り付け高台で、椀の底部と思われる。

なお近江型黒色土器は認められなかった。

B. 陶器

灰釉陶器(19、20) 梗が若干ある。東濃系のものと考える。

青磁(21) 碗の破片が1点ある。釉の色調は、やや濁ったコバルトブルーで貢入が入る。

陶器(22) 裸釉を施した天目茶碗の底部である。美濃か。

C. 土器小結

以上、構内跡出土の土器を見てきたわけであるが、次に土師器の皿を中心としてその時期を考えてみたい。

土師器皿Aは、その形態の特徴からみて、灰釉陶器を伴うもので、10世紀のものと考えてよいだろう。ただ、この時期の遺物は、今回の出土品中例外的なものといえる。

土師器皿Bは、中ノ坊遺跡でみたように12~13世紀代に位置づけられ、土師器椀を伴うのであろう。

土師器皿Cは、14世紀代のものと考えられ、青磁碗が同じ時期にあたろう。

土師器皿D、Eは、15世紀のものと考えられ、天目茶碗もこの時期にあたろう。

今回の調査で検出された唯一の遺構である焼土壙からの出土土器(第10図)は、小さな底部から内寄して立ち上がる口縁を持つ皿で、この形態はBタイプの皿と様相を異にしており、器高も比較的高く作られている。この焼土壙の中の土器には、(18)のEタイプの小皿を伴うことから、時期的にもEタイプと同様に15世紀代のものと考えることができよう。(本田修平・兼康保明)

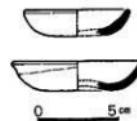
(2) 金属製品

金属製品には、鎧、鉄釘、形状不明鉄製品、銅製飾り金具、銭貨などが出土している。

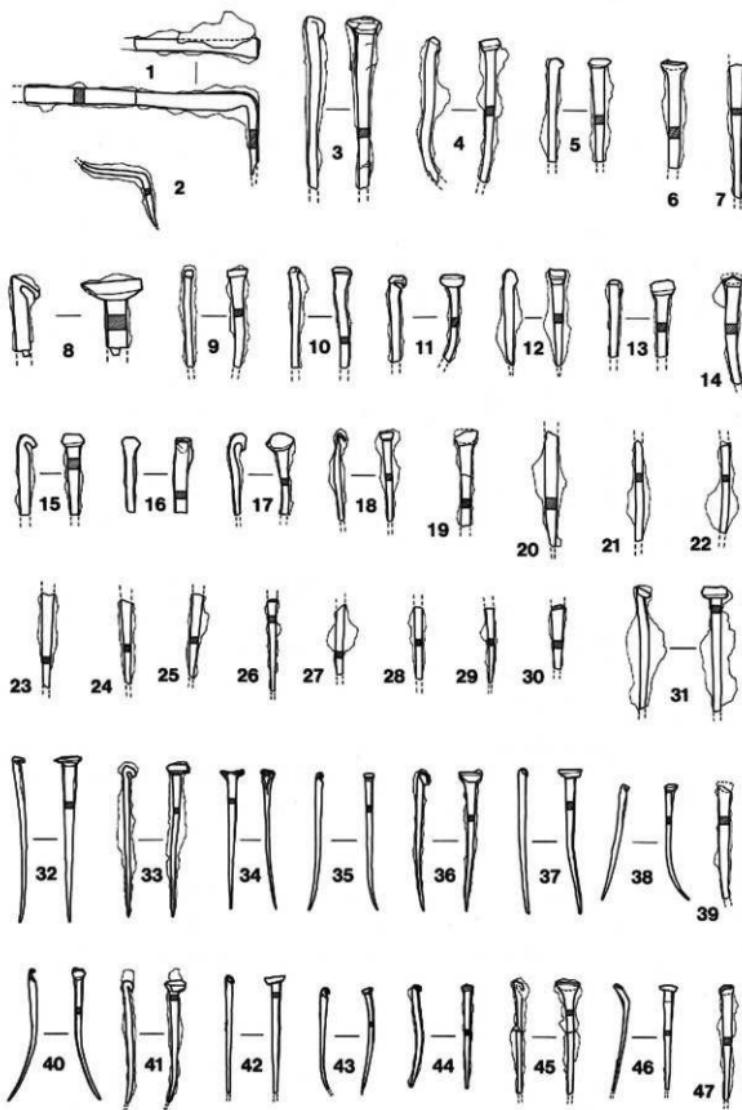
鎧(1) 第33トレンチ拡張部から出土した。先端部と片方の端部を欠損している。

鉄釘(2~71) 2~30は第33トレンチ拡張部から出土した角釘で、一端を薄くして折り曲げて頭部を作る。

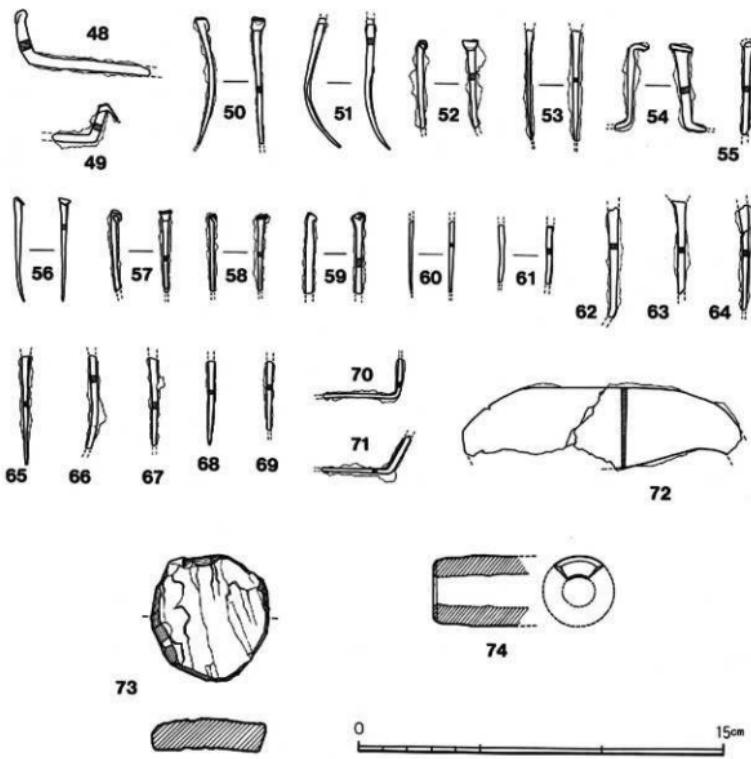
3、7は復元長10~12cmになると思われ、大釘の部類に入るであろう。



第10図 焼土壙出土土器



第11図 鉄製品実測図



第12図 鉄製品・その他実測図

31~71は、第33トレンチ拡張部の焼土壌内より出土した角釘で、2~29の釘に比べて細身である。

不明鉄製品(72) 薄手で幅広い。一端が細くなり、柄部に続くと思われる。鎌か?

銅製飾り金具 第33トレンチ拡張部の焼土壌内より出土。火を受けているため破損が著しい。

銭貨 第33トレンチ拡張部の焼土壌内より出土。火を受けて変形しているが、北宋錢の「至道元宝」と推定される。

(3) 石製品・土製品

石製小型円板(73) 扁平な石の周囲を打割って円形に整形したもので、直径 5.0cm、厚さ 1.2cmである。色調は灰色をした、硬質の石である。

形状不明土製品(74) 直径 3 cm程の円筒形になると思われる。

石製品、土製品ともに用途は不明。

(山口順子)

5. 小 結

昭和52年度に発掘された中ノ坊遺跡は、本年度調査地域にまでは広がっておらず、字中ノ坊よりかなり距離のへだたった、字構口から遺構および遺物包含層が確認された。遺跡の位置、性格など明らかに中ノ坊遺跡と異なることから、この遺跡を構口遺跡と名付けた。

構口遺跡の主要部は、第37~39トレンチにあたり、自然のものと思われる落ち込みが検出された。また、第38トレンチ西壁張部では、人為的なものと思われる敷石遺構を検出したがその性格については不明である。ただ落ち込みとの関係から考えて、あるいは池のような遺構の一角ではないかと推定しているが確証はない。

遺物は、遺物包含層より平安時代から室町時代の土器が出土するが、そのほとんどは土師器・土師質土器の皿である。出土遺物中、最も新しい土師質土器よりみて、室町時代の15世紀を境に遺構は埋没して、現在みられる景観に変貌したものと考えられる。

なお、伊黒中世墓地の調査については、貢数の都合上、次年度の報告書に掲載する。

(兼康保明)

第3章 長浜市熊岡山西遺跡

1. はじめに

熊岡山西遺跡は、長浜市常喜町地先における県営は場整備工事において、幹線排水路工事中に発見されたものである。発見通知を受けた時点では、工事は大部分が終了しており、残り僅か30数mを残すのみであった。遺跡がこの残工事部分に及ぶであろうことが当然予想されたので、関係機関との協議の上、発掘調査を実施することとしたのである。

調査は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。調査の担当は、滋賀県教育委員会文化財保護課 技師 田中勝弘が当たり、本報告も田中勝弘が執筆した。

なお、現地調査では、京都産業大学考古学研究会会員の諸氏の補助を得た。また、長浜市教育委員会には、いつもながら色々お世話をなった。ここに記して謝意を表します。



第1図 遺跡位置図



第2図 付近地形図及び調査位置図

2. 位置と環境

熊岡山西遺跡は、長浜市常喜町地先に所在する。長浜平野の東を界する横山丘陵から派生する標高160mほどの小丘である熊岡山の西側の平地にあって、標高94m付近に立地している。

熊岡山西側の平野部は、周知遺跡の分布の希薄な所であって、熊岡山の丘頂から丘腹にかけての須恵器類の散布地をはじめ、北側の本庄遺跡、馬塚古墳、森の木古墳、小幡古墳等、山裾及びそれに近い平地で数か所の分布が知られているにすぎなかった。しかし、今回の発見は、幹線排水路部分だけでなく、は場整備工事範囲の殆どで土器類の出土していることが判明し、熊岡山西遺跡が予想以上に大規模な集落跡であった可能性が強くなった。

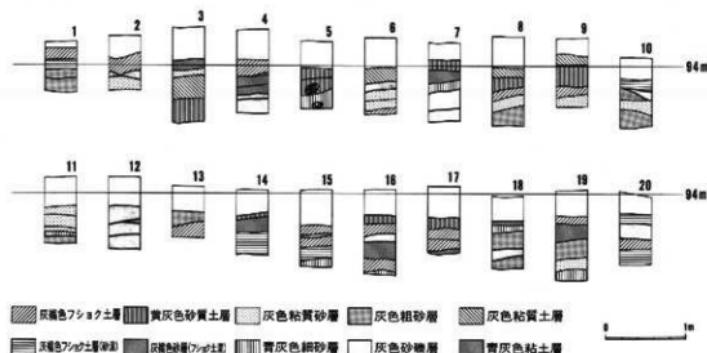
3. 調査の経過

調査は、残工事部分のみを対象としたが、既に掘削工事の終了している部分については、およそ10m毎に、20ヶ所で断面観察を行い、土層の柱状図を作成し、遺物包含層や遺構の分布状況を確認して、今回の調査の参考資料とした。また、周辺工事地域を踏査し、遺物の出土状況を調べた。

調査対象部分については、すでに表土が除去されており、その下方の砂質土や粘質土が露頭している状況があり、また、この状況で遺物の包含されていることが明確であった。従って、土層の堆積状況を観察しながら、層ごとに掘下げ、層位別の遺物の取り上げと遺構の有無を追求した。遺物の包含層は、基本的には砂質土と粘質土



第3図 断面土層図



第4図 試掘地点断面土層柱状図

で3層あったが、結局各層位の包含遺物に差異はなく、造構についても確認することはできなかった。従って、遺物包含層をすべて除去した時点での調査を終了した。

4. 調査の結果

イ. 遺物包含層

調査対象地点の基本的な堆積層位は砂質土、粘質土、腐蝕土の3層の互層である。遺物は、耕土直下の砂質土と粘質土に包含されており、厚さおよそ60から70cmを計る。包含層は8層に区別できるが、腐蝕土はない。

ロ. 遺 物

出土遺物は、若干の自然木や加工木を含むが、大半が土器類であり、須恵器類は含まれない。弥生時代からいわゆる布留式の段階までのものであり、斐形土器、壺形土器、高杯形土器、器台形土器、瓶形土器、鉢形土器等がある。斐形土器が半数をしめ、次いで高杯形土器、壺形土器、器台形土器、瓶形土器、鉢形土器とつづく。石製品、金属製品等は出土していない。

i. 斐形土器

A類(図5) 受口状口縁の斐形土器である。A1類(17~23)は頸部の屈曲が緩やかで、口縁部は垂直かやや外傾する。口縁部外面に刺突列点文を施すもの(17, 18)と無文のものとがあるが、施文のあるものでは口縁端部に内傾する面を取り、無文のものではほぼ水平な面を取る。17では口縁部内面に指頭押圧が認められる。A2類(1, 2)では、頸部の屈曲が強く、口縁部はほぼ垂直に立ち、端部は内傾する比較的幅の広い面を取る。口縁部下端に刻み目あるいは刺突文を施す。体部外面に縱方向の刷毛目調整痕がある。A3類(4~9, 16, 24~26)は口縁端部を外方へ小さく肥厚させて面を取るもので、口縁部外面に施文のあるもの(4~9)と無文のものとがある。4, 7では刺突列点文、5, 6は刻み目文、8は平行沈線文、9は刺突文である。A4類(3, 10~15)は頸部の屈曲が強く、口縁部はやや外傾し、口縁端部を外側へ引き出して、幅広い水平な面を取る。体部の外面は刷毛目調整し、内面は蓖削りの認められるもの(15)、刷毛目の認められるもの(14)などがある。A5類(28, 29)はA4類に似ているが、口縁部外面が内窪し、端部は丸みを帯びる。体部外面は刷毛目調整している。A6類(30~32)はA5類に近似するが、口縁部は大きく外傾する。頸部内面に明瞭な稜を取るもの(30, 31)がある。

B類(図6-1~5) S字状口縁のもの。頸部の屈曲が大きく、口縁部は大きく外反し、端部を丸く仕上げている。頸部外面を箆状工具で押さえるもの(1, 5)がある。体部外面に搔き目の見られるもの(2, 5)がある。

C類(図6-10, 12) 北陸系の素文有段口縁のもの。「く」の字形の頸部で、口縁部はやや外反ぎみである。

D類(図6-14) いはゆる庄内型の斐形土器である。

E類(図6-15~27) 口縁端部を内側に肥厚させる布留式の斐。口縁端部が丸く肥厚するもの(16~19, 22)と肥厚して端部に僅かな面を取るもの(15, 21, 23~27)とがある。

F類(図7-1, 3, 5) 口縁部の中程が肥厚し、端部を外方へ引き出して外傾する面を取るもの。口縁部内面に刷毛目を残し、外面は撫で調整するが、刷毛目を僅かに残す。頸部内面に明確な稜を取る。

G類(図7-12, 13) 頸部が「く」の字形に屈曲する極めて短い口縁部を持つもの。

H類(図5-27、図6-11、13、図7-2、4、6-11、14-26) 上記以外のものを一括した。

ii. 壺形土器

A類(図8-10、12-14、17) 広口壺形土器。口縁端部を下方へ折り曲げて幅広い面を取り、その外面に平行沈線文、円形浮文を施すA1類(13)、口縁端部を上下に肥厚させて面を取るA2類(10、12)とがある。A2類では、口縁端部外面に平行沈線文や円形浮文をほどこし、10では、口縁部内面に羽状刺突列点文を施す。A3類は、口縁端部を下方へ肥厚させるが、無文のものである。

B類(図8-7、8) 二重口縁の壺形土器。

C類(図8-22、23、図9-29、32-34) 小型壺形土器。C1類(図8-22、23)は口縁部が僅かに外反するもの、C2類(図9-29)は頸部が「く」の字形に屈曲するもの。C3類(図9-33)は細頸状のもので、口縁部は直線的に開く。内外面を縱方向に磨きしている。C4類(図9-32、34)は内寄する口縁部で、端部付近の外面に平行沈線文、あるいは平行沈線文、刺突列点文、刺突文を交互に施文している。34では内外とも磨きしている。C5類(図9-31、31)は小形丸底のものである。

D類(図8-3~5) 「く」の字形の頸部で、直線的に開く口縁端部を肥厚させて、外面に面をとる。口縁部外面に刷毛目のあるもの(4、5)がある。

E類(図8-11) 直口壺形土器で、口縁部は短く、垂直に立つ。

F類(図8-6、18-21) その他を一括した。6は二重口縁の壺形土器であろうか。18には刺突列点文がある。

iii. 豊形土器(図9-20、22、26-28)

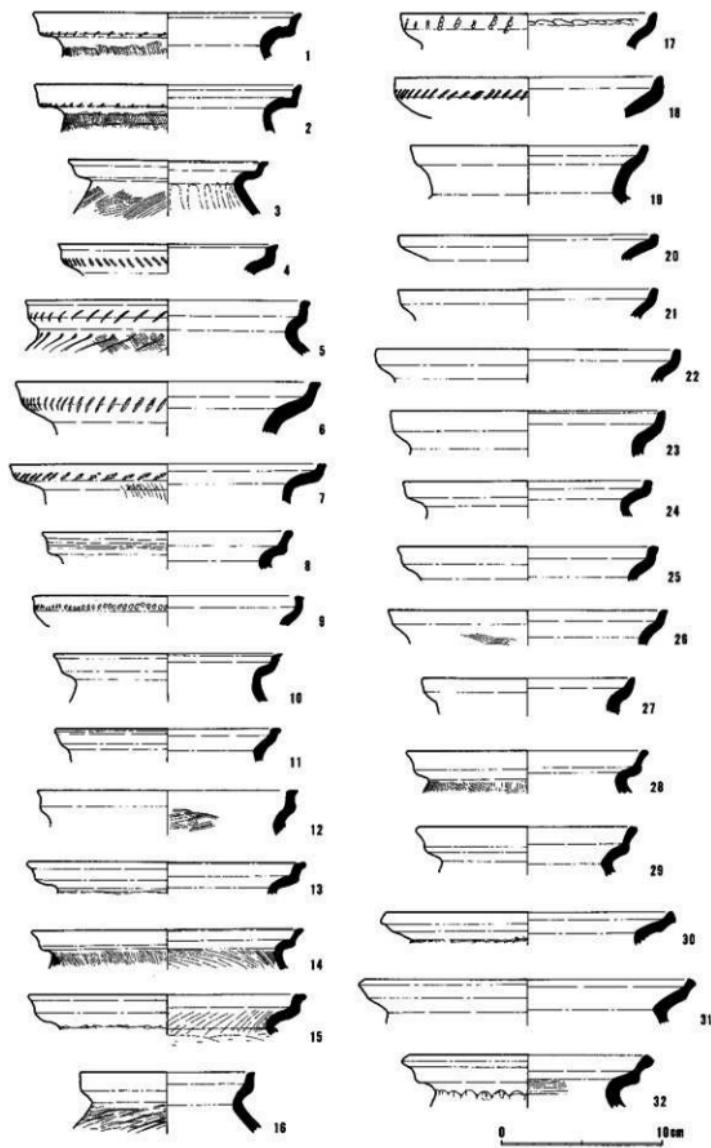
脚台を持つもの(20、22、26)と持たないもの(27、28)とがある。脚台を持つものでは、脚端部が幅の狭い面を取るもの(20)、内側へ小さく肥厚させるもの(22)、丸く納まるもの(26)がある。22では、脚部内面に指頭痕が残り、26では、刷毛目が残る。いずれも高さの低い、規模の小さいものである。脚台を持たないものは、小さな平底部に一孔を穿つ。

iv. 器台

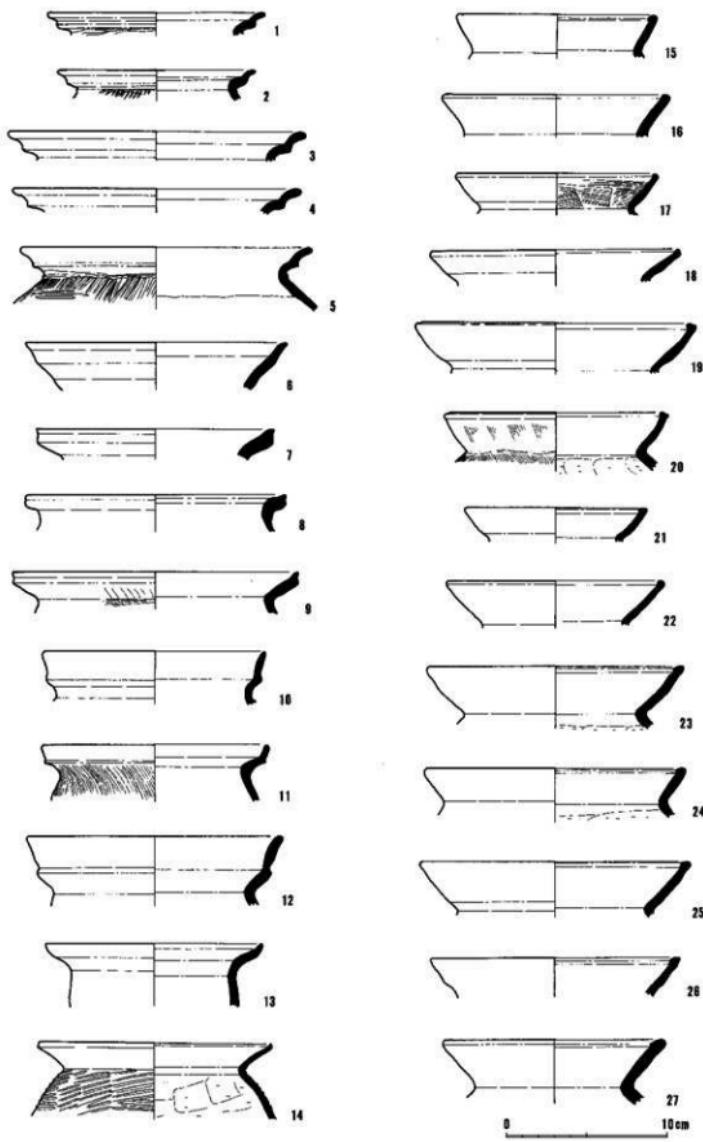
A類(図8-1、2、図9-35、36)は、中央部が細く、上下に大きく開き、鼓形を呈するもの。受け部(1、2)は、直線的あるいはやや外反し、端部を上下また下方に小さく肥厚させて狭い面をとる。脚部は円孔を穿ち、外面を磨きしている。B類(図10-7、8)は小型の器台。7では、内外面に刷毛目があり、8では内面に磨き痕がある。C類(図8-16)は北陸系の装飾器台であろうか。口縁端部を下方に垂下させて外側に面を取り、平行沈線文を施している。受け部の中程に立ち上がりの痕跡があり、その内側に円孔が穿たれている。

v. 高杯形土器

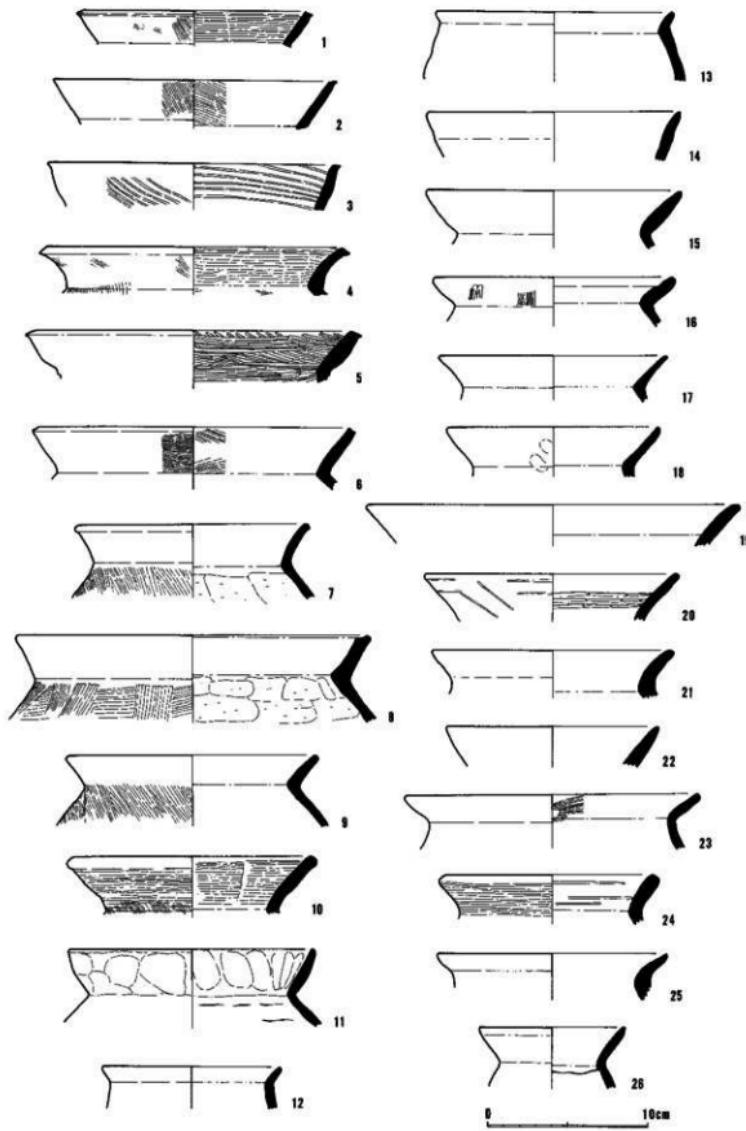
A類(図10-19)は杯部の深いもので、口縁部は弯曲しながら大きく開く。内面に幅の広い平行沈線文帯を持つ。B類(図10-18)は杯部の浅いもの。内面に磨きを施す。C類(図10-6)は楕形の深い杯部を持つ。内外面ともに磨きを施す。D類(図8-9、15)は、口縁部を水平にのばし、その端部を上下また下方に肥厚させ、その外面に平行沈線文を施す。9ではさらに円形浮文を施す。また9では、口縁部内面に一列の沈線文、竹管文、山形の沈線文、羽状の刺突列点文を施す。脚部(図10-1~5、9~17)には2類あり、一つは1~5と9~13で、筒部が大きく開くもので、外面を磨きしているものが多い。また、三方に円孔を穿つもの(5、9、10、12)、4方に穿つもの(11)、3方に2個一对で穿つもの(13)などがある。他は14~17で筒状の脚部を屈曲させて大きく開くもの。筒部内面を削りしているものが多い。



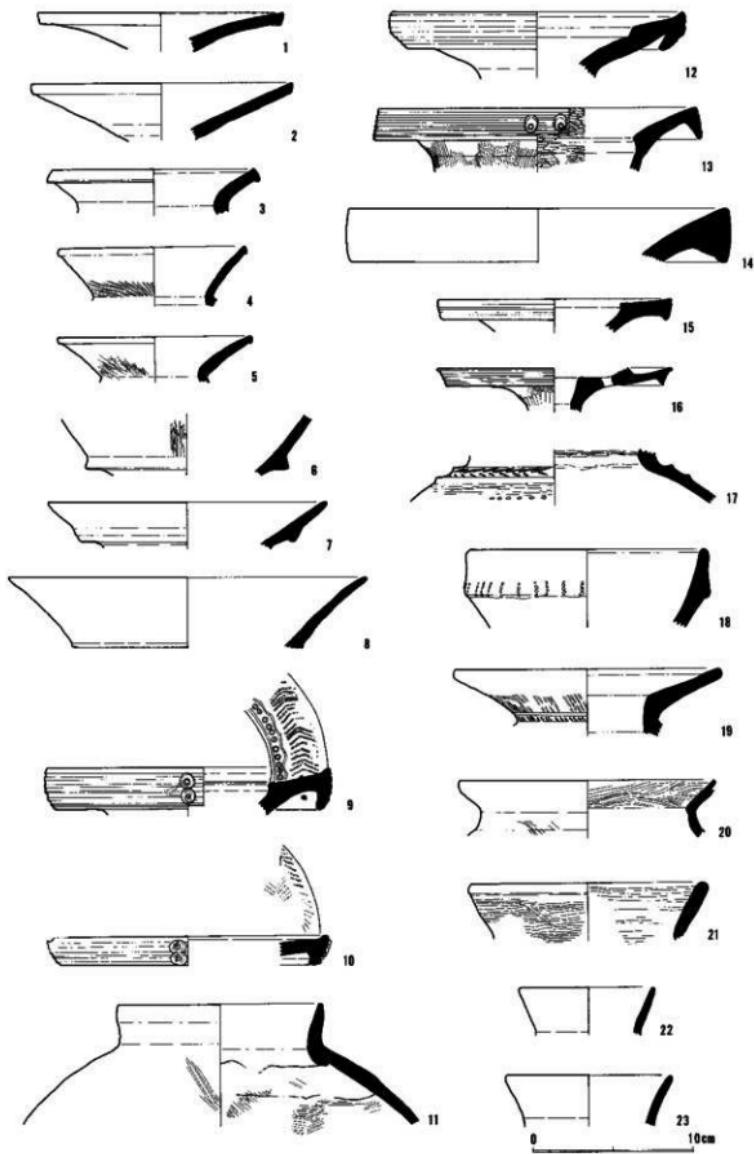
第5図 出土土器実測図(1)



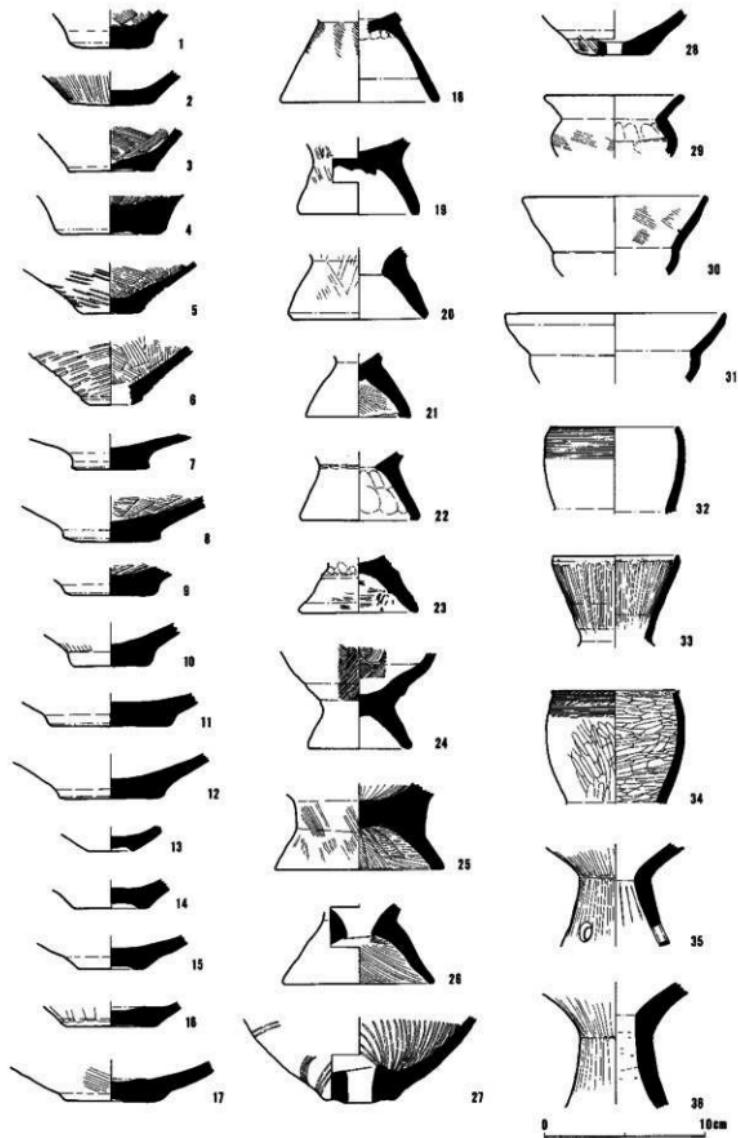
第6图 出土土器实测图(2)



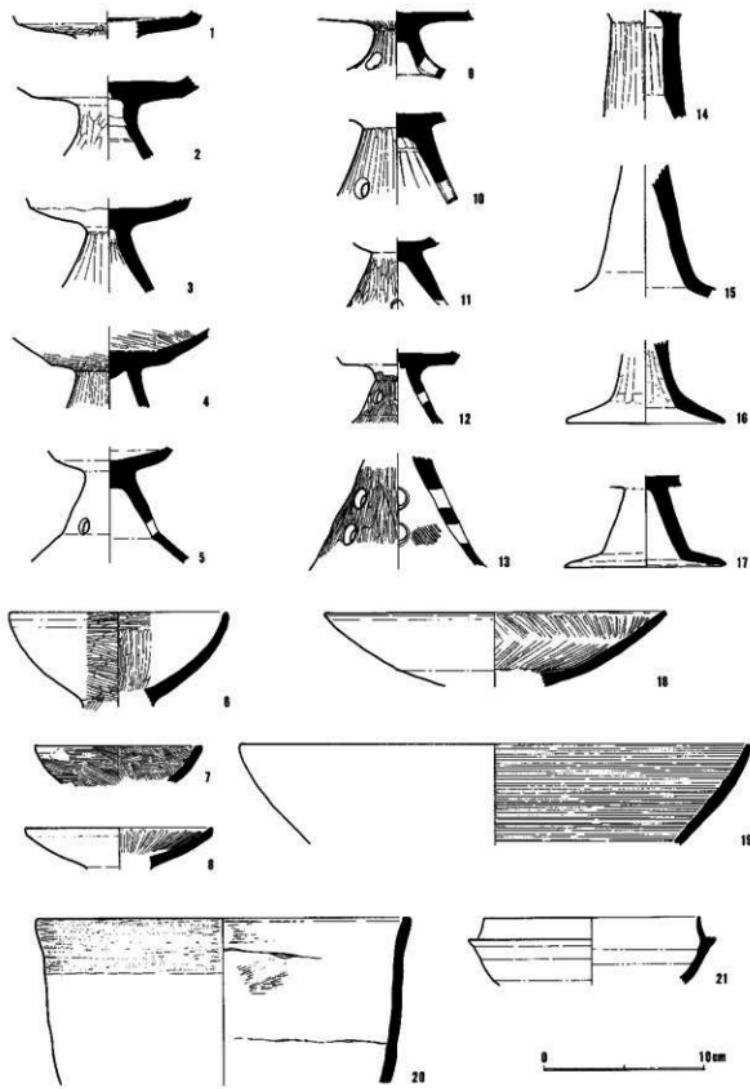
第7図 出土土器実測図(3)



第8図 出土土器尖測図(4)



第9図 出土土器実測図(5)



第10図 出土土器実測図 (6)

vii. 鉢形土器

図6-7~9の3点で、大きく屈曲させた短い口縁端部を小さく上方へ引き出し、その外面に瘤んだ面を取る。体部は不明だが鉢形の土器になるものと思われる。

viii. そ の 他

図9-1~17は甕あるいは壺の底部。5. 6は各々逆方向の下がりで叩き目がある。18. 19. 21. 23~25は脚台部 18は高く、脚部が厚くなるが、折り返しはない。他は低いもので、21. 25では端部が内側に肥厚する。21. 25では内面に刷毛目がみられる。

図10-20は直線的な体部で、黒褐色を呈した色調で、比較的硬質の土器である。口縁部の内外を横撫でしているが、粘土の輪積痕が良く残る。

図10-21は表採品で、須恵器の杯身。

5. ま と め

以上、包含層出土土器の各器種を形態的に分類して報告してきた。それらの幾つかはそれぞれ時期差を示すものと考えられる。甕類では、A 1類の17. 18は頸部の屈曲程度を除けばA 2類と共通する点が見られる。A 3類にも無文のものと施文のあるものとがあるが、形態的には変化はないものとみてよい。A 1類の17. 18を除く他のものでは、口縁端部に外傾が見られ、端部の肥厚を除けばA 3類に近い。A 4類は口縁端部の引き出しがA 3類より一層強く、何れも施文はない。このような特徴からすれば、A 1類の17. 18とA 2類、A 1類の他のものとA 3. A 4類の3時期に大別できるであろう。他の甕形土器についてみても、F類は弥生時代後期の特徴をもっており、D類はいわゆる庄内式の甕である。C類は北陸系の素文有段口縁のもので、口縁部は垂直に近い立ち上がりを示す。E類の布留式の甕は、やや口縁端部の肥厚程度のことなるものを含むが、近似した時期のものとして扱える。B類の東海系のS字状口縁のものは、外傾の強い口縁部となっており、E類とさほど時期差の無いものと考える。このように甕形土器では、弥生時代後期、庄内平行期、布留平行期の3時期のものがあると見てよかろう。

壺形土器についても、A類のII縁端部の形態から、A 1. 3類が弥生時代、A 2類が庄内のものと考えられる。B類の二重口縁は布留式の特徴であろう。C類の小型壺形土器では、1. 2類と3. 4類とで区別できる。その他の器種では、器台のA類、高杯のD類など、器台のC類、高杯のA. C類など、器台のB類、高杯のB類などのやはり3時期のものがある。甕あるいは壺の底部は弥生時代から庄内にかけてのものであろうし、脚台部は庄内から布留式にかけての中に納まるであろう。高杯の脚部についても弥生時代から布留式平行期の間で2時期以上に区別できる。

以上のように、熊岡山西遺跡の包含層出土土器類は、弥生時代後期から布留式平行期の間で3時期に大別できる。時期的な細分については別の機会に譲るが、弥生時代については後期の後半、布留式については比較的古い段階のものと考えられる。また、地域色については、各時期を通して、北陸系のものを若干含み、東海系のものがやや多く含まれる。特に装飾性の強い高杯や壺形土器に東海系のものがあり、甕形土器では近江系のものが主流を占めている。ただ布留式平行期では、畿内系のかめの占める割合が大きくなっている。

6. お わ り に

今回の調査は、工事中の不時発見に伴うものであったが、比較的良好な状態で土器類の出土を見た。やや時期

幅のあるものであったが、弥生時代から古墳時代にかけての過渡期に位置するものであり、その変遷、組成は今後の検討いかんによつては、湖北地域の歴史資料として貴重なものとなろう。

図 版

図版
一
マキノ町仏性寺遺跡



調査地全景（南より）



調査地全景（北より）

図版
二 マキノ町仏性寺遺跡



埋没樹木出土状況（第1トレンチ）

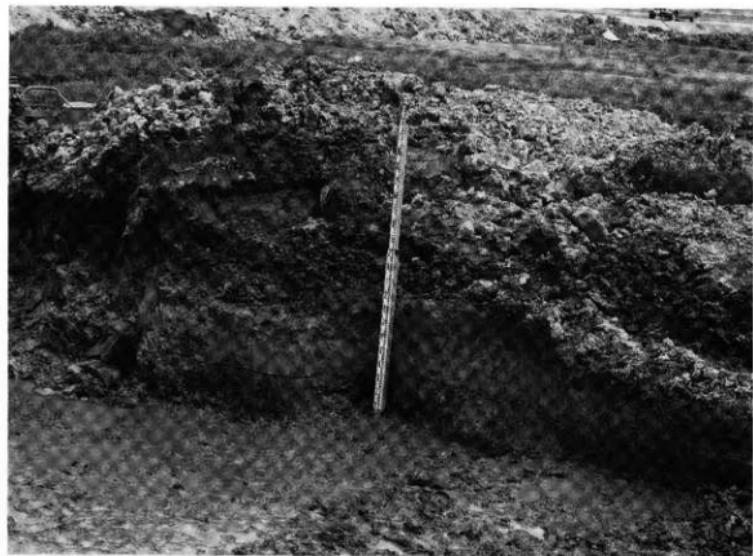


加工木・自然木の出土状況

図版
三 マキノ町仏性寺遺跡



第54 トレンチ壁面

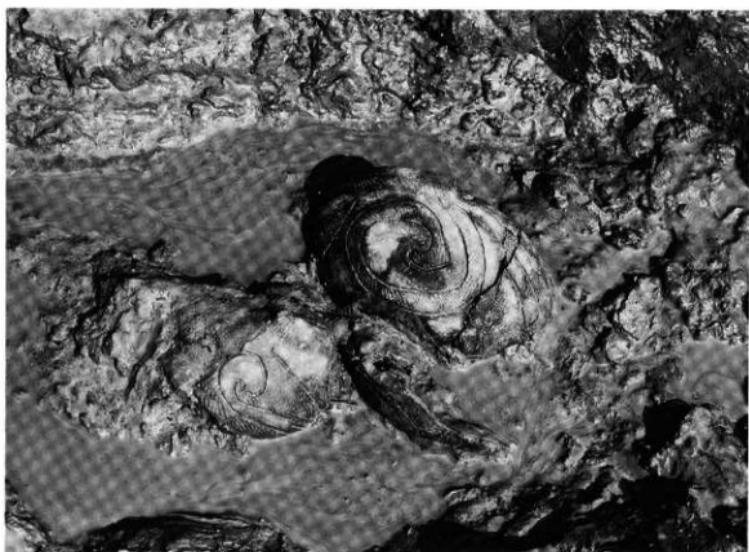


第54 トレンチ壁面

図版 四 マキノ町仏性寺遺跡

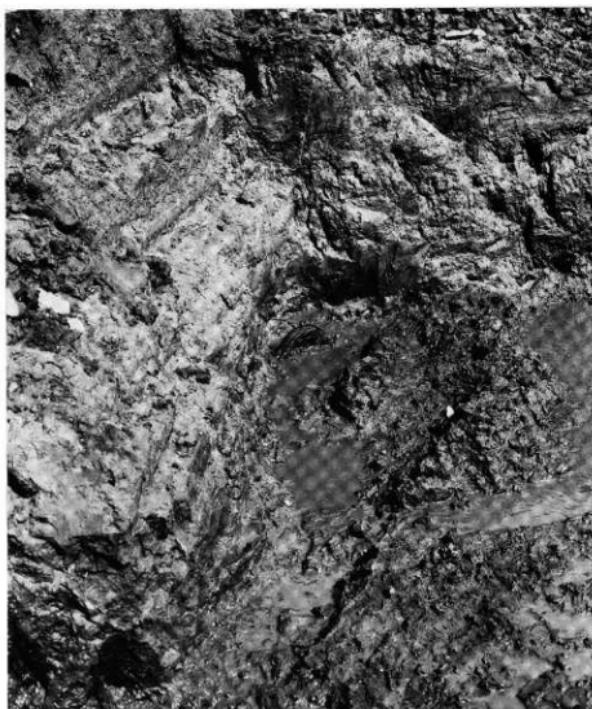


第54 トレンチ縄文式土器出土状況



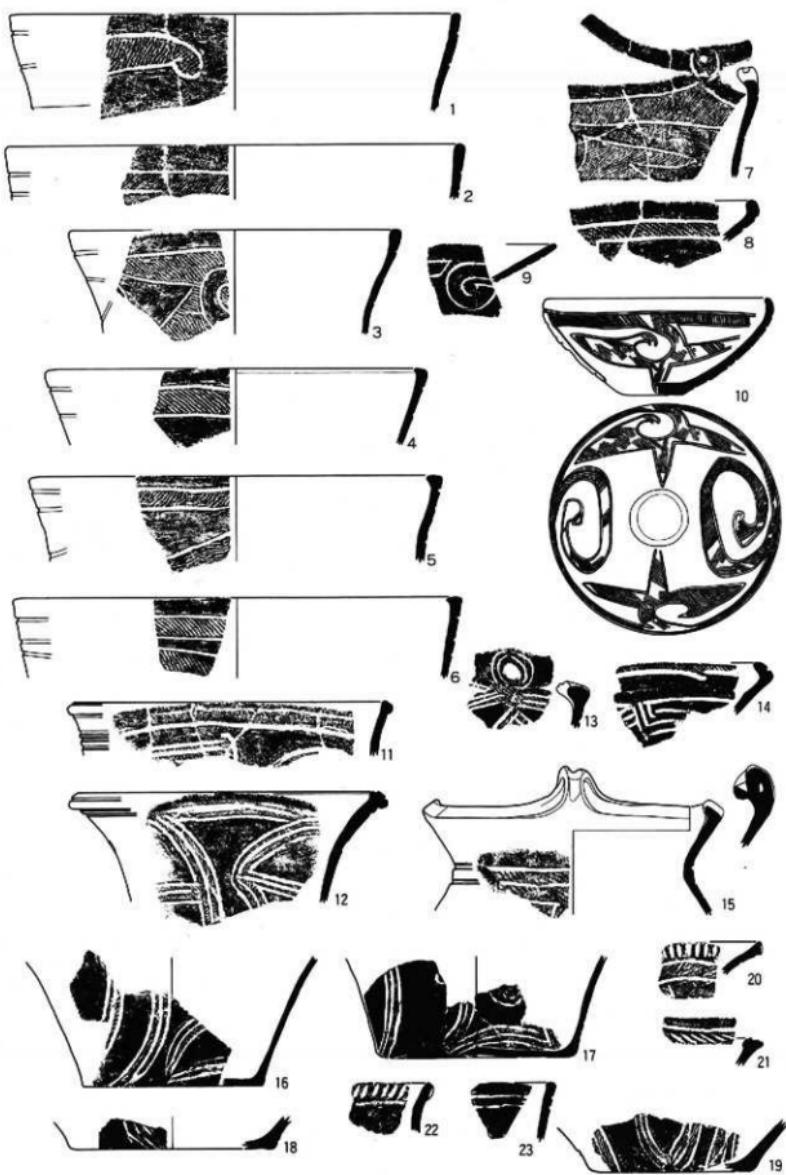
第54 トレンチ縄文式土器出土状況

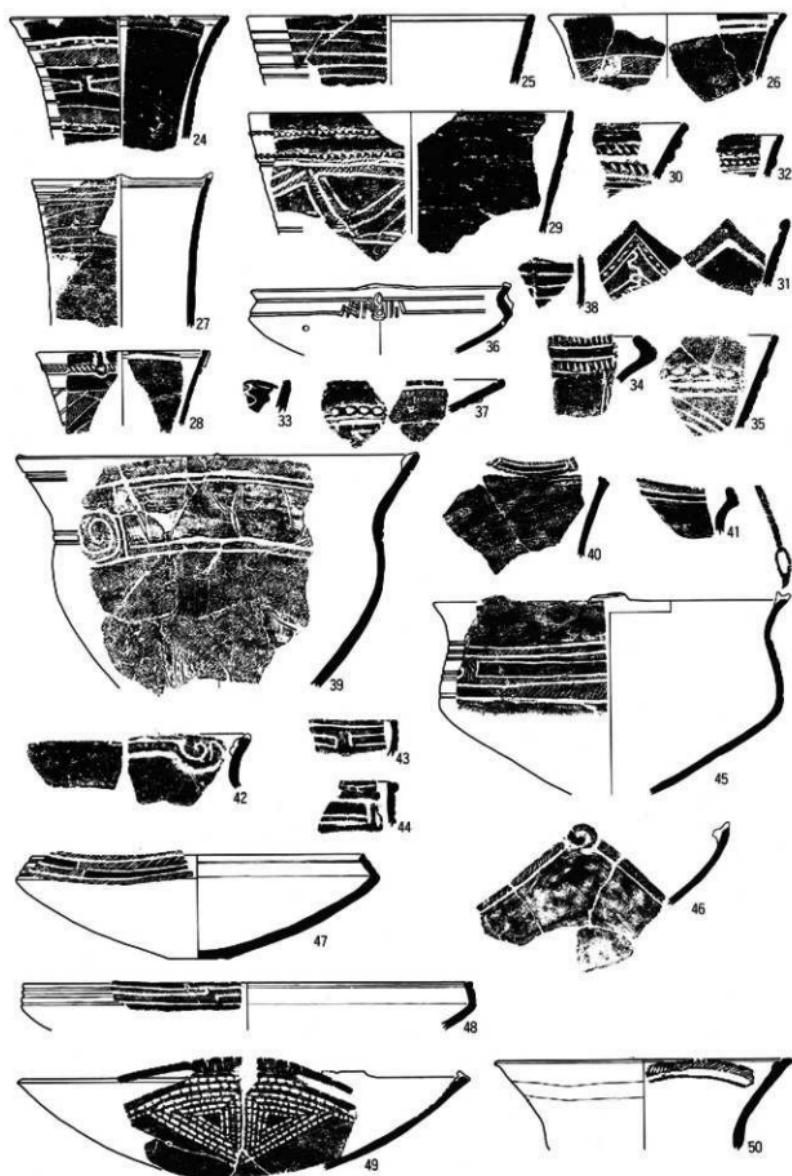
図版 五 マキノ町仏性寺遺跡



第54 トレンチ縄文式土器出土状況

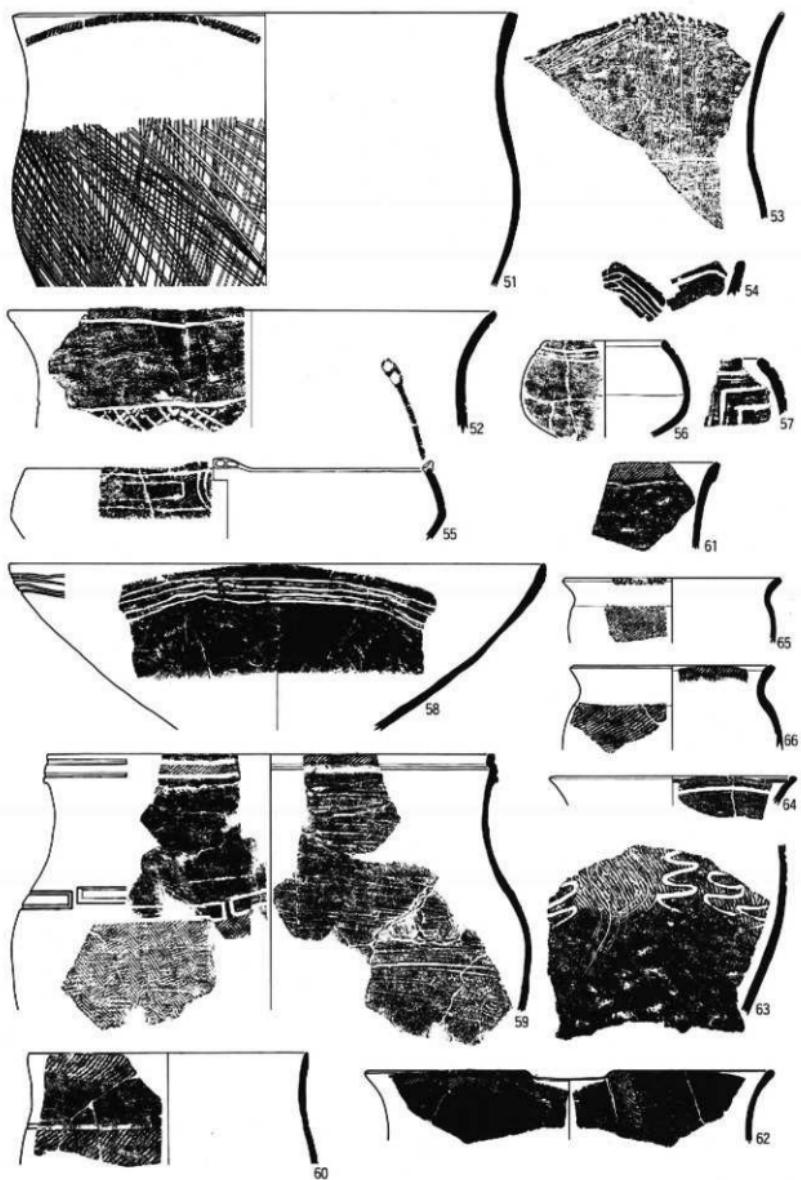
図版 六 マキノ町仏性寺遺跡 繩文式土器実測図(1) (縮尺 $\frac{1}{4}$)



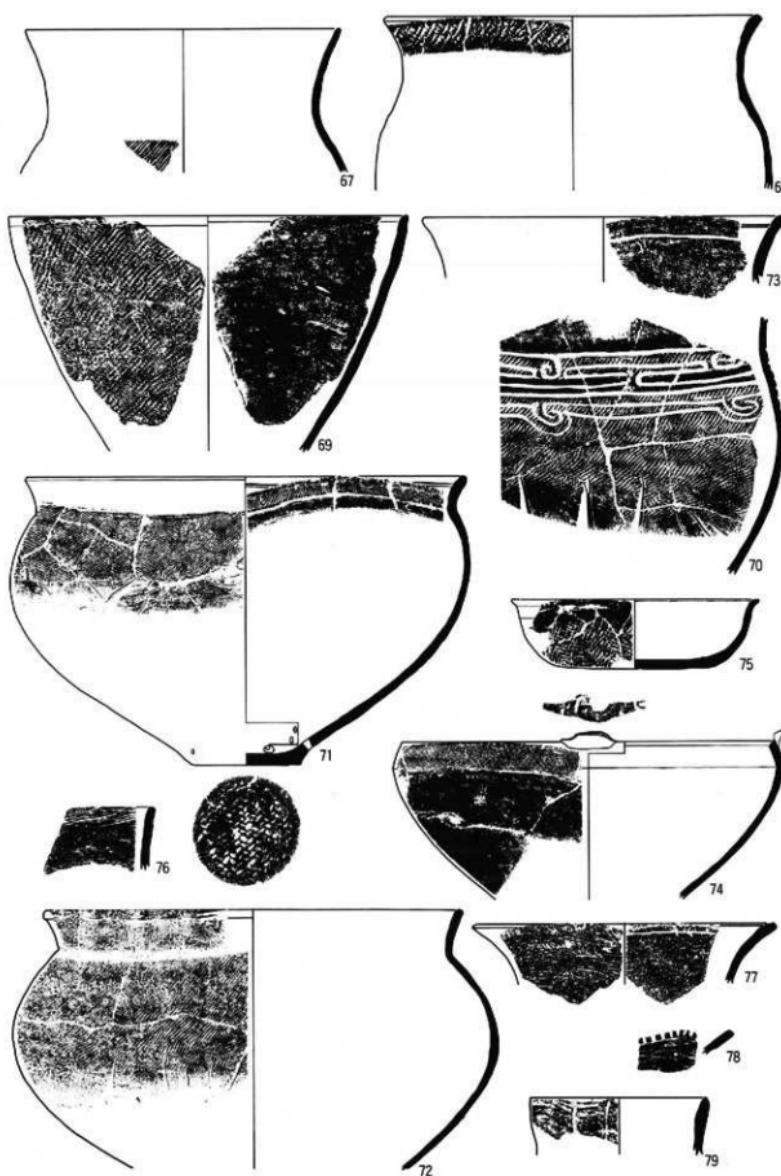


図版八 マキノ町仏性寺遺跡

縹文式土器実測図(3) (縮尺1/4)

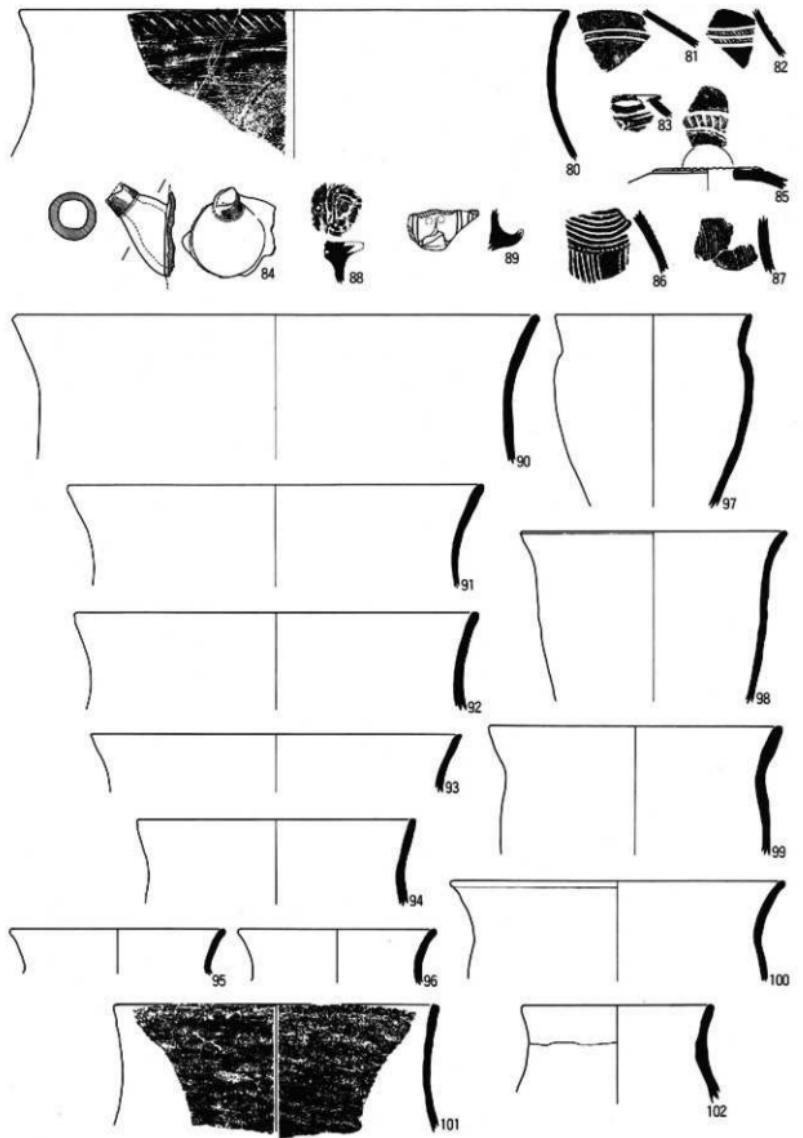


図版九 マキノ町仮性寺遺跡 繩文式土器実測図(4) (縮尺 $\frac{1}{4}$)

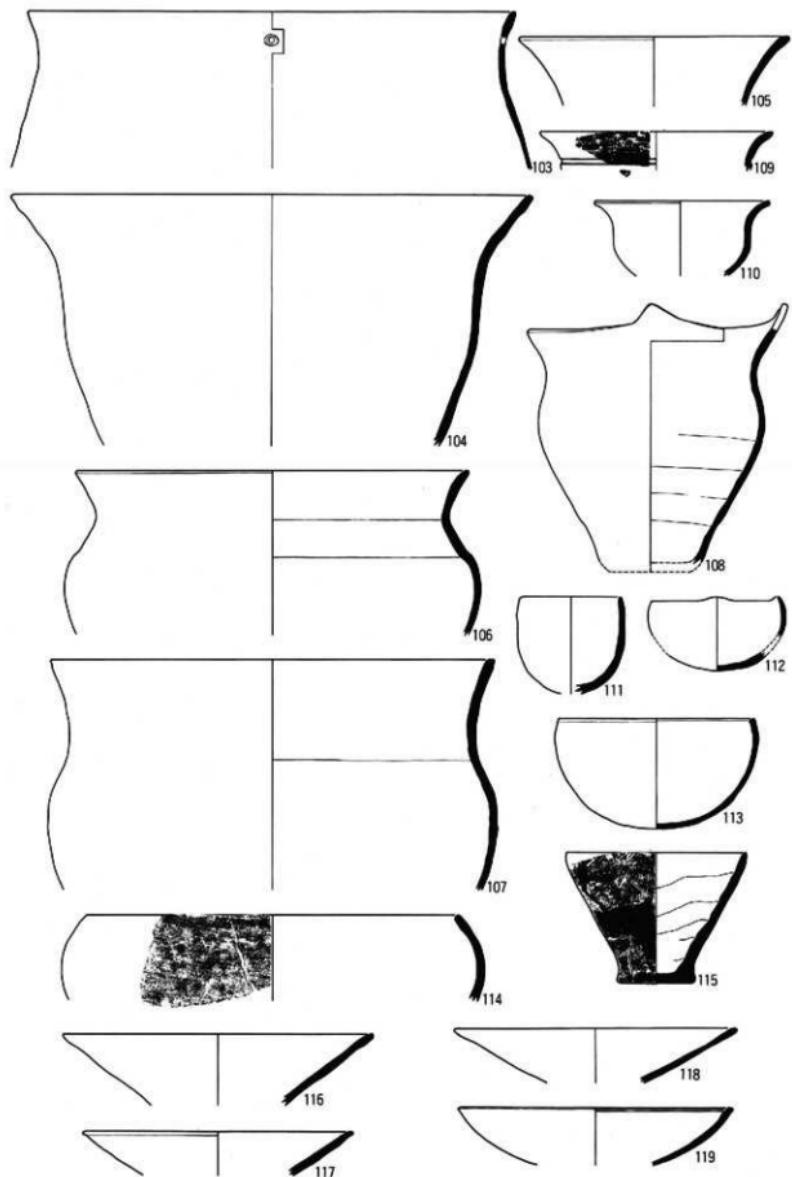


図版一〇 マキノ町仏性寺遺跡

縄文式土器実測図(5) (縮尺1/4)

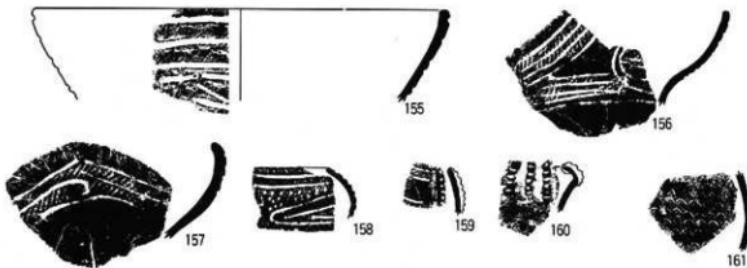
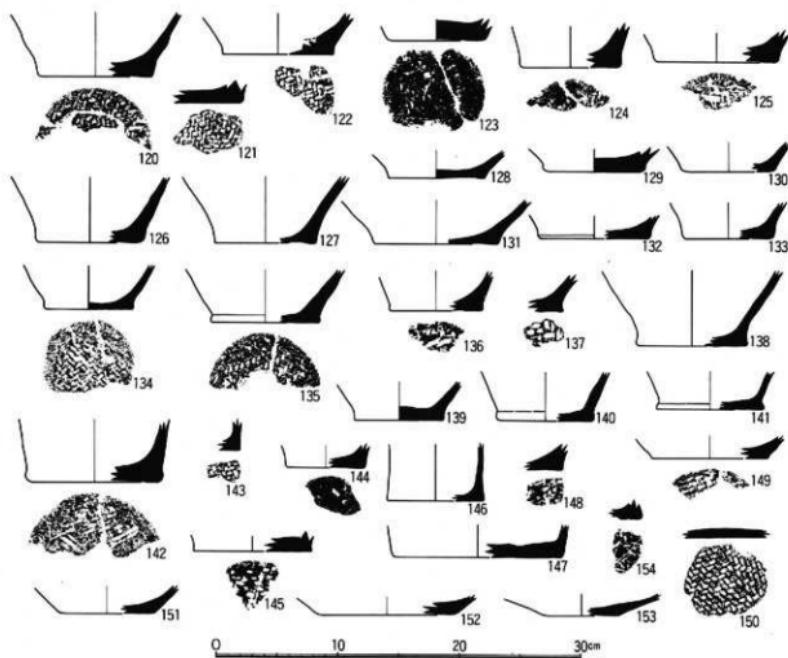


図版一一 マキノ町仏性寺遺跡 繩文式土器実測図(6) (縮尺 $\frac{1}{4}$)



図版一二

マキノ町仏性寺遺跡
縄文式土器実測図(7) (縮尺1/4)

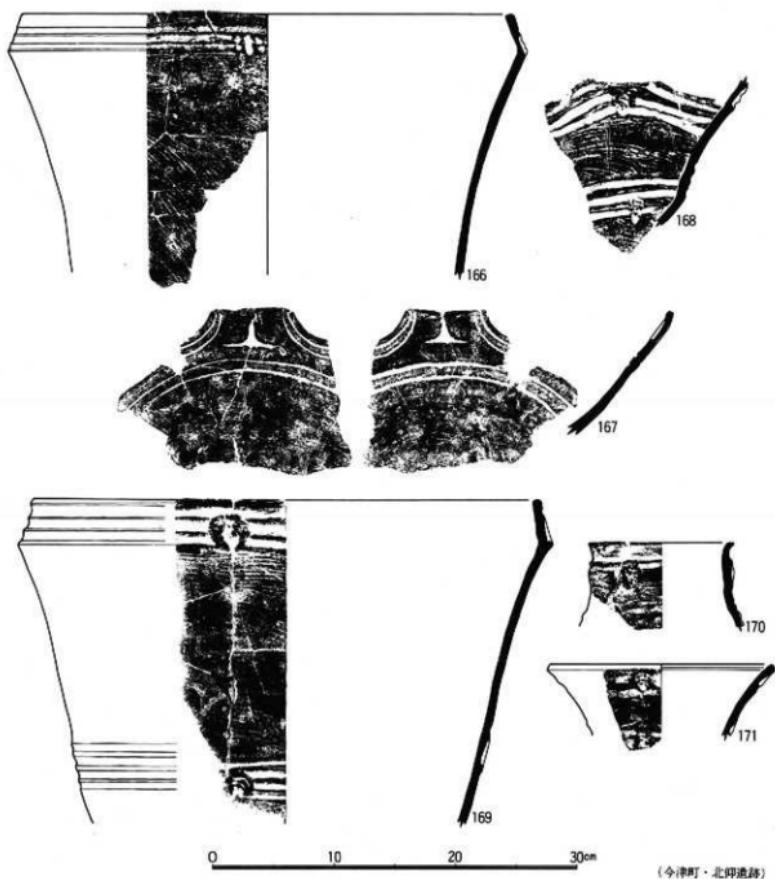


(マキノ町・上能田遺跡)



(今津町・北御遺跡)

図版一三 マキノ町仏性寺遺跡 繩文式土器実測図(8) (縮尺 $\frac{1}{4}$)



(今津町・北仰遺跡)

図版一四 高島町中ノ坊遺跡

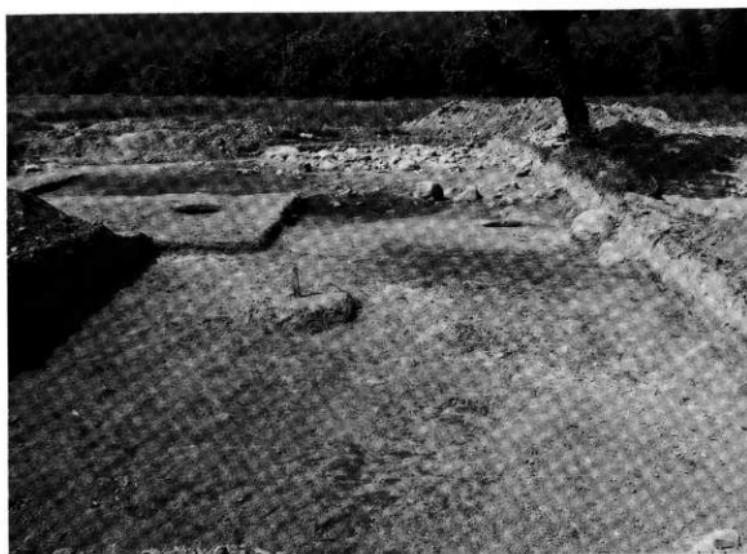


調査地西半（東より）

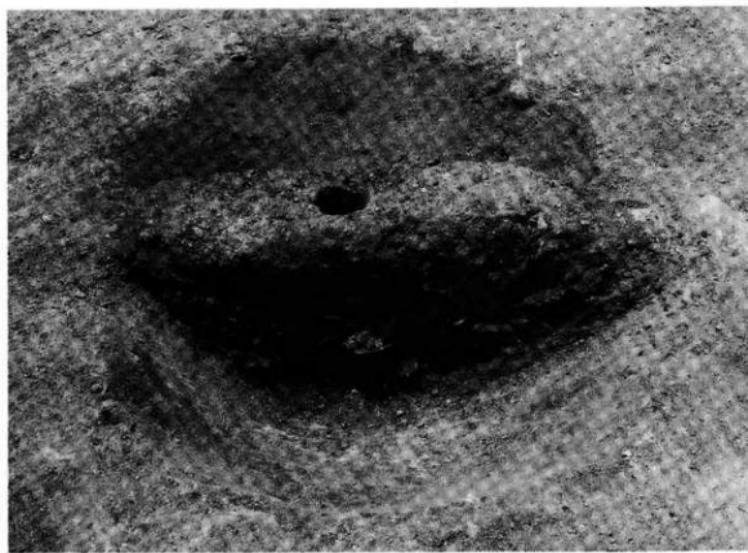


調査地東半（西より）

図版一五 高島町中ノ坊遺跡



第33 トレンチ拡張部（南東より）



焼土壙（北より）

図版一六 高島町中ノ坊遺跡



第37～40トレンチ遠景（南より）



第38トレンチ全景（東より）

図版一七 高島町中ノ坊遺跡



第38～40トレンチ（西より）



集石の状況（北より）

図版一八 高島町中ノ坊遺跡



第38トレンチ西拡張部敷石（西より）

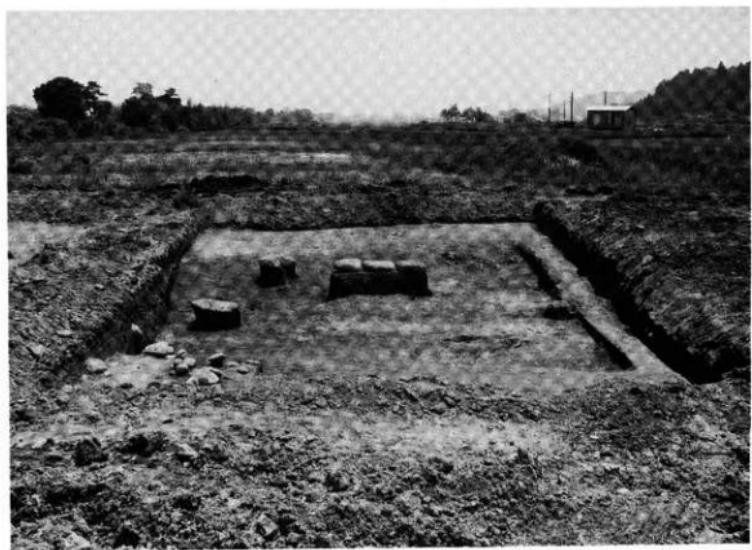


同上（南より）

図版一九 高島町中ノ坊遺跡



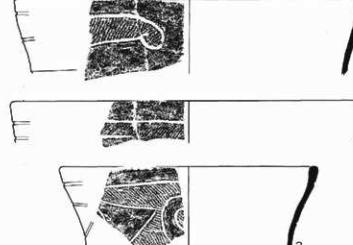
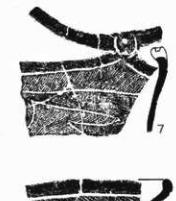
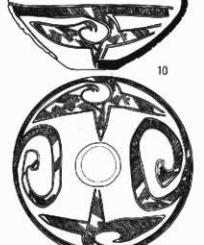
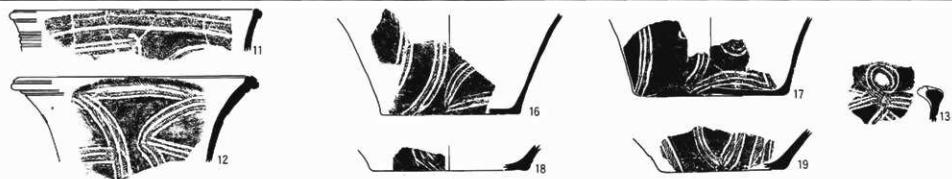
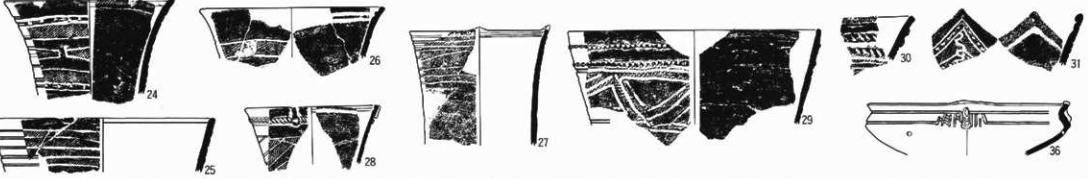
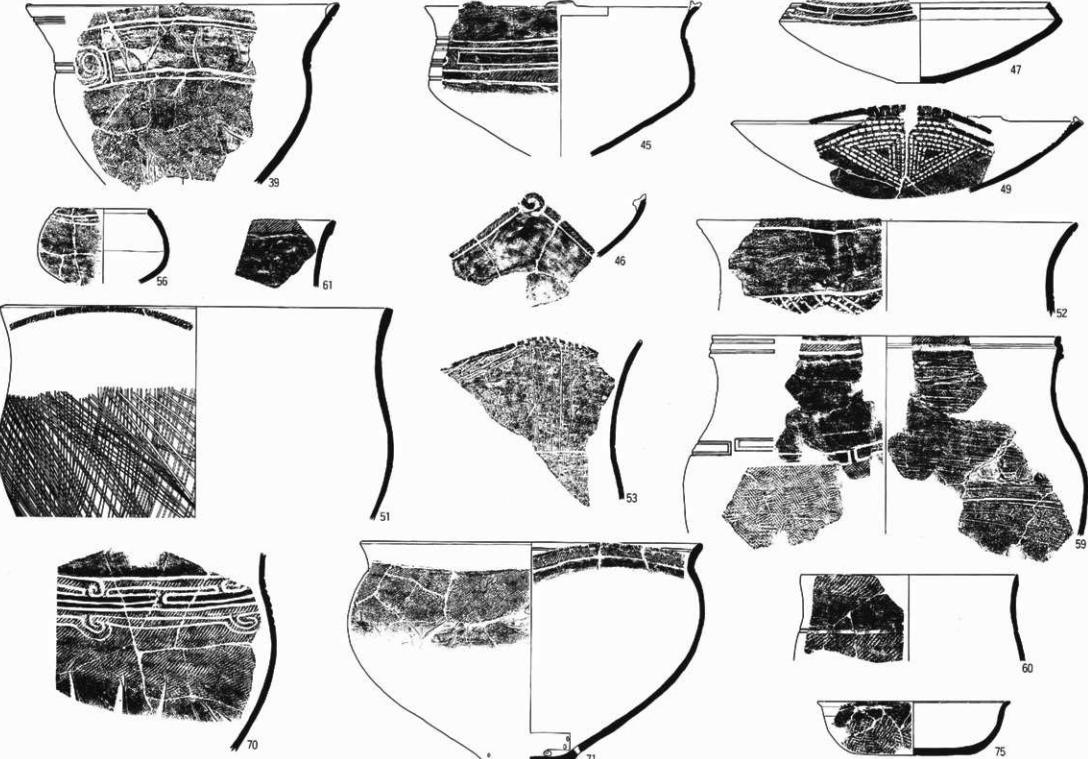
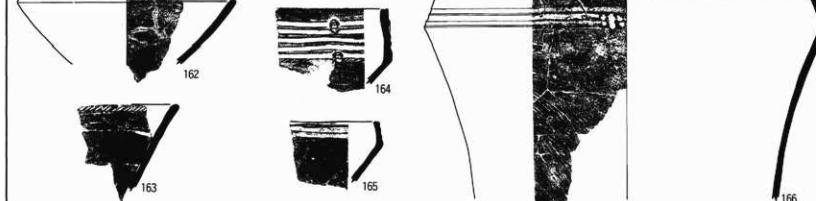
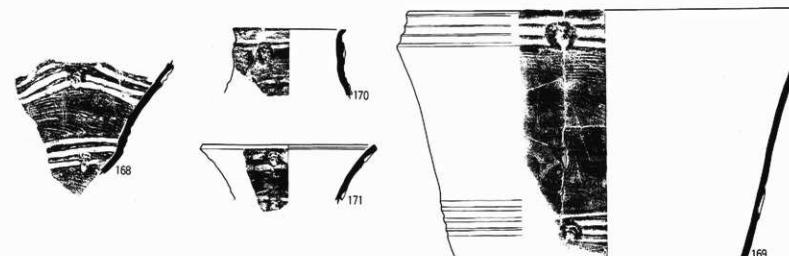
第37トレンチの集石（北西より）



第39・40トレンチ全景（北西より）

高島郡内縄文時代後期土器編年表

(ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-3付図)

仏性寺遺跡			上開田遺跡		北仰遺跡	
中津式						
福田KII式						
堀之内II式						
北白川上層式						
式一乗寺K						
元住吉山II式						
宮瀧式						

昭和54年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-3

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 輸送業者 同朋舎

京都市下京区中堂寺鍾山町2

TEL (075) 361-9121